

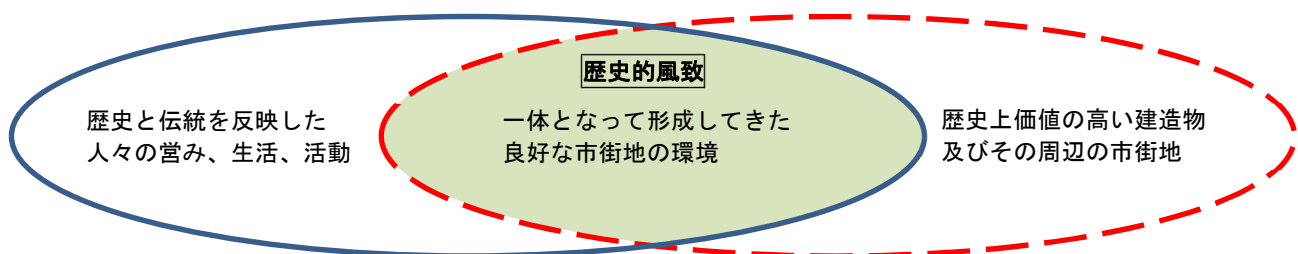
第 2 章 維持及び向上すべき歴史的風致

彦根市の維持及び向上すべき歴史的風致

本市は、古くから畿内と北国・東国とを結ぶ交通の要衝として長い歴史を刻んできた。そこには豊かな文化が生まれ、時代と地域によって異なる個性を持ち、多様な展開を示しながら、そこに生きる人々と共生してきた。

特に江戸時代は、彦根藩の政治・経済・文化の中心として都市構造を発達させ、今日に残る歴史的建造物などの文化財は、人々の活動の場として彦根に固有の伝統と文化を育んできた。

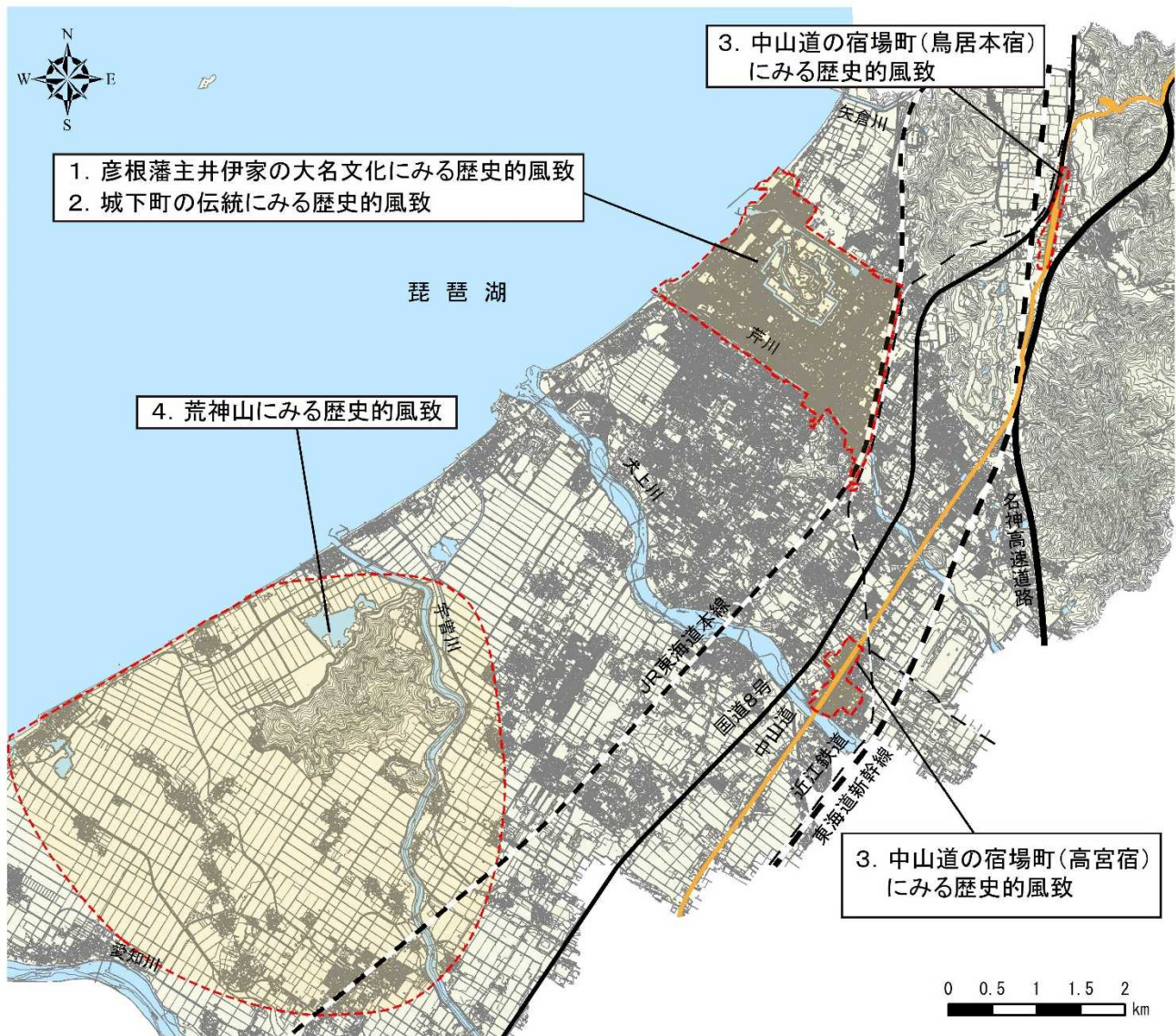
「歴史的風致」とは、歴史まちづくり法第 1 条において「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその他の活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義している。



歴史まちづくり法に基づく歴史的風致の定義により、本市における維持向上すべき歴史的風致として、次の 4 つの歴史的風致を選定した。これら歴史的風致は、将来にわたって維持し向上を図るべき貴重な資産である。

- 1 彦根藩主井伊家の大名文化にみる歴史的風致
- 2 城下町の伝統にみる歴史的風致
- 3 中山道の宿場町（高宮宿・鳥居本宿）にみる歴史的風致
- 4 荒神山にみる歴史的風致





維持向上すべき歴史的風致

1 彦根藩主井伊家の大名文化にみる歴史的風致

(1) 現代に生きる「能と狂言」の継承

彦根では、能や狂言が定期的に上演され、子どもたちや大学生による発表会も催される。このような文化が根付いてきた背景には、彦根藩主井伊家に由来する大名文化の継承が色濃く見られる。

江戸幕府は、能を式楽（公儀の儀式に用いられる芸能）に定めて奨励した。彦根藩でも幕府に倣って能役者を召し抱え、能舞台を築いて能を催した。最盛期には、彦根城内に2棟の能舞台が存在した。そのうち、現在、表御殿を復元した彦根城博物館の中央にある能舞台は、寛政12年(1800年)に当所に築造された歴史的建造物である。明治11年(1878年)に表御殿が解体された際、能舞台が古沢町にある井伊神社に移築された。右の写真は、昭和6年(1931年)当時の能舞台で能が演じられた時のようすである。その後、昭和25年(1950年)に、沙々那美神社境内（現在の護国神社境内横）に補修移築。さらに昭和38年(1963年)に護国神社に曳家によって移築された後、昭和62年(1987年)に表御殿の地に彦根城博物館を建設するに際して、再び元の位置へ移築復原された。

能舞台は、移築を繰り返しながらも守り継がれ、さまざまな場所で能が演じられた。現在は、この能舞台で、伝統芸能が継承されており、平成24年(2012年)3月に市指定文化財として指定している。

日頃は、展示室に展示している井伊家伝来の能面や能装束と同様に歴史的建造物としてガラス越しに見ることができるが、この能舞台を用いて、6月と11月には水無月狂言の集いと錦秋^{きんしゅう}狂言の集いを、9月には彦根城能を催し好評を博している。幕末の大老として知られる井伊直弼が、自ら制作した能「筑摩江」や狂言「鬼ヶ宿」も上演される。彦根城博物館には、「筑摩江」や「鬼ヶ宿」(原題は「安達女」^{あだちおんな})の直弼自筆の草稿本も存在している。

歴史的建造物である彦根城博物館の能舞台は、このような定期的に能や狂言のほか、滋賀県立大学能楽部の定期発表や博物館事業「子ども狂言教室」の発表会など、様々に活用されている。

「子ども狂言教室」は、もともと学校教育との連携で生まれた事業であり、彦根の伝統芸能を若い世代に広め継承する目的で始められ、その練習の成果を博物館の能舞台で披露したことが発端であった。子どもたちが伝統の能舞台で声を張り上げながら舞う姿は、伝統芸能の伝承へと繋が



彦根城能（能舞台：彦根城博物館）



井伊神社に移されていた
昭和6年当時の能舞台



子ども狂言稽古風景
（能舞台：彦根城博物館）

っていくものである。



彦根かるた

昭和 58 年（1983 年）に、彦根の歴史学習に関わる様々な活動を行なってきた彦根少年少女ふるさと研究友の会（社団法人彦根青年会議所）が、創立 5 周年を記念して、市内の郷土の歴史や文化を楽しみながら学べる教材として、「彦根かるた」を発行した。

札は、いろは 47 文字に「彦」を加えた 48 枚で構成されている。

毎年、かるた取り大会が開催され、子どもたちの札を取る力強い声が聞こえる。



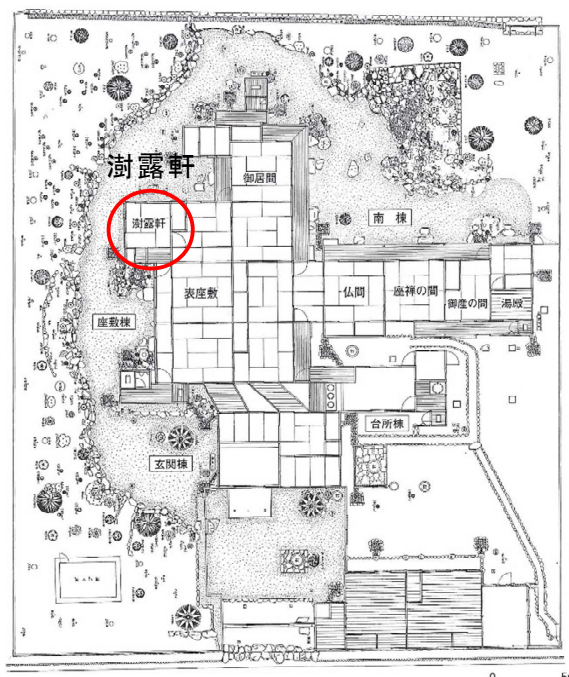
彦根かるた

(2) 「茶の湯」の伝統

彦根には、千家など町衆の茶の湯とは異なる、大名茶の系譜を引く茶の湯文化が今日まで息づいている。井伊直弼が創設した茶の湯の道統を継ぐ団体が健在であり、市内各所で茶会が催されている。石州流は、近年、全国の城下町にある石州流各派が連合して全国組織ができ、彦根でも大会が催されて活況を呈した。

彦根藩では、伝来する茶道具や記録から歴代の藩主が茶の湯を嗜んだことが知られる。井伊家 13 代当主直弼は、茶の湯にも精進した当主であった。31 歳の若さで武家茶道石州流の一派創立を宣言し、弟子を抱えた。特別史跡内にある埋木舎には、直弼が茶の湯に励んだ澍露軒という茶室がある。井伊家 11 代当主直中の 14 男であった直弼は、この埋木舎を永住の場所と定めて本格的に改修し、天保 7 年（1836 年）、座敷北側の下屋を茶室に改修して「澍露軒」と命名する。茶室は、四畳半席でその東に半間の水屋を設けている。現在は公開され、しばしば茶会が催されている。また、名勝玄宮楽々園内の茶室である鳳翔台や臨池閣は、直弼が催した茶会の記録である『彦根水屋帳』（彦根で嘉永 4 年（1851 年）10 月 2 日から安政 4 年（1857 年）閏 5 月まで行われた井伊直弼による 16 会の自筆自会記）などの史料にその名が見られる。

その後、玄宮園では、度々野点茶会が催され、古くは昭和 33 年（1958 年）10 月 4 日の新聞で、旧城下町一帯で催される彦根城まつりが 4 日から始まり、井伊大老をしのぶ野点茶会が催されることが報じられている。また、昭和 61 年（1986 年）以降では、秋に催される「虫の音を聞く会」において野点茶会が催されるなど、形を変えながらも庭園での野点茶会が続いている。なお、今日では玄宮園内の鳳翔台において、池泉回遊式庭園を前に呈茶^{ていちゃ}のもてなしを受けながら、大



埋木舎の平面図



澍露軒



鳳翔台と臨池閣



鳳翔台

名茶の世界を満喫できる。その他、市内では、城内や城下の直弼ゆかりの箇所^{箇所}で茶会が催され、多くの招客で賑わっている。

彦根城博物館の小学生を対象とした普及事業「キッズ・サマースクール」では、展示室で直弼ゆかりの茶道具ならびに復元された茶室（天光室）を見学し、復元木造棟で実際に茶の湯を体験する。この体験では、お茶の先生のお点前^たを拝見した後、自ら茶を点てる。子どもたちにとって、「ほんものとの出会い」は貴重な体験であり、彦根の伝統文化を継承できる場となっている。

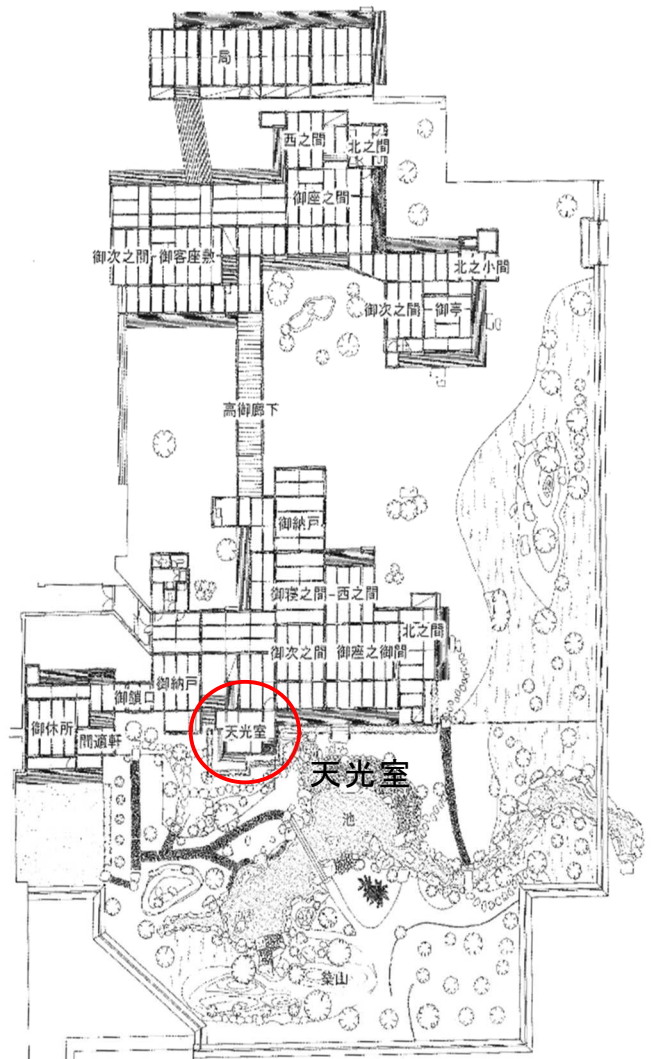
茶の湯文化は、和菓子の文化ともつながっている。旧城下町には、今も和菓子店が多く店を構えている。創業が江戸期にさかのぼる店も健在である。江戸時代後期に、和菓子店「糸屋重兵衛」で作られていた餅菓子である「益寿糖」^{えきじゅとう}は、城下で人気があり、城にもしばしば納められていた。近年、この益寿糖が資料に基づいて復元され、彦根城博物館の茶席に出されて好評であった。そのほか「埋れ木」や「柳のしずく」など井伊直弼にゆかりの名をつけたものや「三十五万石」のように彦根藩の石高を名づけたものなど、茶菓子としての個性を競っている。また、名古屋から伝わった外郎^{ういろう}が、「彦根ういろう」と名を変えて今日でも味わうことができる。

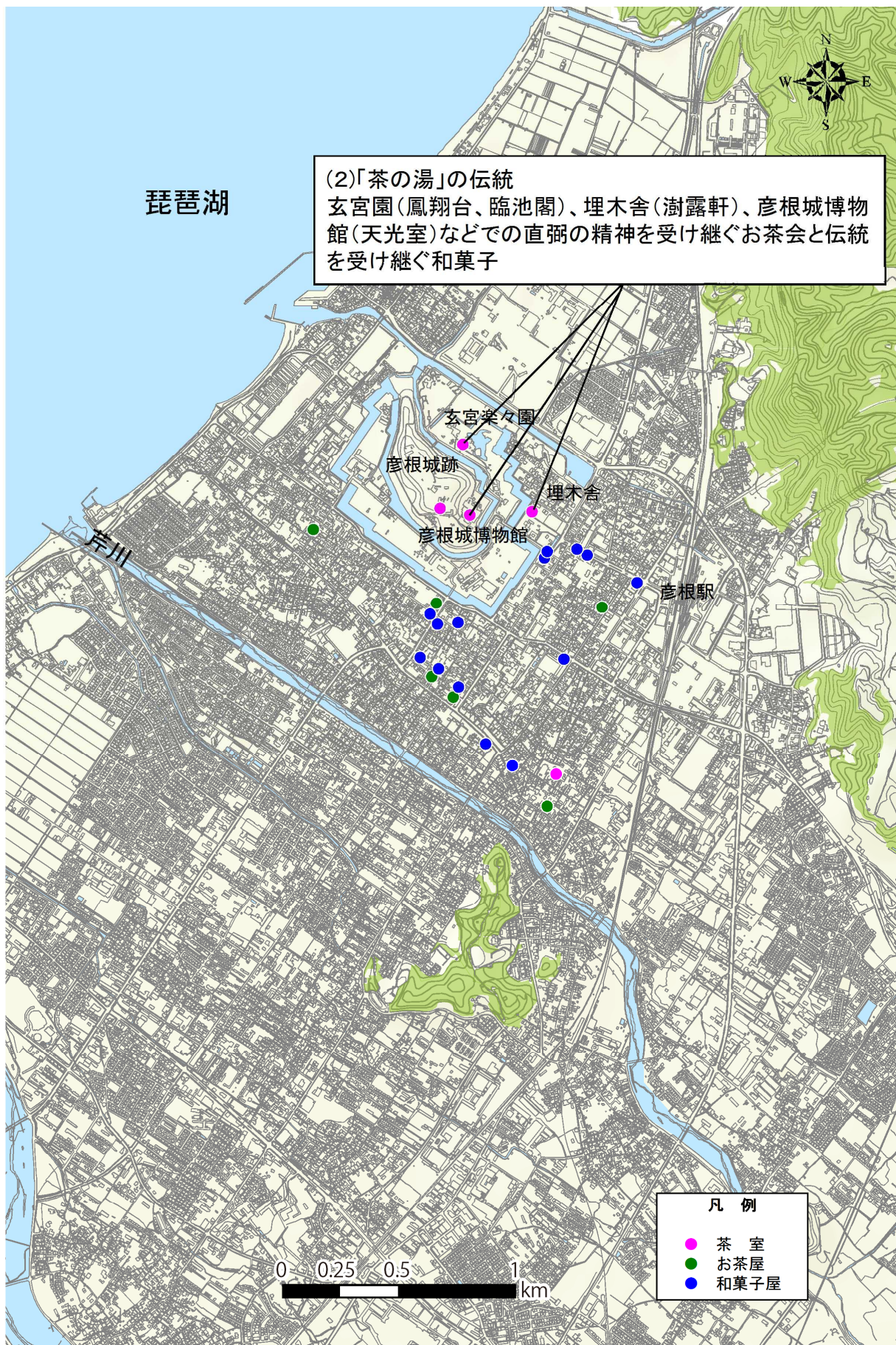


玄宮園での茶会



復元された「益寿糖」





(2) 茶の湯の伝統

（３）彦根の「城まつり」

彦根では、毎年 11 月 3 日に旧城下町一帯で恒例の「城まつり」パレードが催され、馬上の井伊直政役を始め、赤備えの甲冑^{かつちゅう}に身を包んだ人々が旗印を掲げて勇壮にパレードする。パレードは、旧外堀ルートから「いろは松」を経て城表の佐和口より城内を通過し、本町筋を経て再び外堀ルートに戻るコースをとる。中堀に面した「いろは松」一帯は、彦根市景観重要樹木の指定第 1 号の松並木（32 本）があり、道幅も 9 間あって通常の街路よりかなり広い。

江戸時代には、彦根藩家中がこの通りに居並び、藩主の国入りを迎え、また、出立を見送った歴史的な場所であり、当時は「松の下」と称されていた。今日でも「いろは松」越しに国宝の天守が遠望でき、中堀に面して二の丸佐和口多聞櫓の白壁が長く伸び、中堀の外には井伊直弼ゆかりの埋木舎や中級武家屋敷の旧池田屋敷長屋門などがある彦根城屈指のロケーションの地である。パレードが当所を通過する際は、勇壮な武者行列はより一層景観に映える。そのほか、周辺には、旧彦根藩武家屋敷（大村家住宅）、旧鈴木屋敷長屋門、旧西郷屋敷長屋門など歴史的建造物が存在する。

この城まつりパレードは、佐和山神社の祭礼である佐和山まつりが起源となっている。清凉寺井伊家墓所内にあった護国殿は、井伊家の祖神である初代井伊直政と二代井伊直孝を祭神とする社殿で、江戸時代には、元旦、2 月 1 日（直政命日）、6 月 28 日（直孝命日）のみ開門され、藩士の参詣が許された。明治維新後、神仏分離により清凉寺から離れて佐和山神社となった。その祭礼である佐和山まつりは、毎年春の 4 月 1 日に催され、今日の城まつりと同様に、甲冑を身にまとった武者が馬上や徒歩で市中を練り歩いた。明



城まつりパレードの様子



いろは松と城まつりパレードの様子



城まつりの時代行列（昭和）
（彦根市立図書館蔵）

治 34 年（1901 年）に挙行された「彦根城開城 300 年記念祭」は、特に盛大であり、その模様を描いて巻子^{かんず}にした資料が旧家に大切に伝存されている。

昭和 13 年（1938 年）、佐和山神社は、財政難などの要因から井伊神社（弘化 2 年（1845 年）建立）に合祀されることとなり、佐和山まつりも休止されたが、そののち昭和 26 年（1951 年）に彦根藩を開いた井伊直政が彦根に開府してから 350 年を記念し、「彦根開府 350 年祭」が、「城まつり」と銘打って開催された。その後、彦根観光協会が催す秋の城まつりに継承され、平成 29 年（2017 年）で 65 回を迎える。

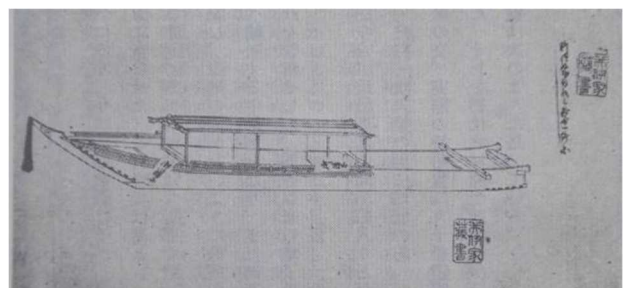
また、琵琶湖に繋がっていた内堀沿いでは、彦根鉄砲隊による古式火縄銃の演武や彦根藩主井伊家に伝来した「御好屋形船」^{おんすき や かたぶね}を再現した船の運行が行われるなど、城まつりパレードとともに一体的な歴史的な風情を感じることができる。



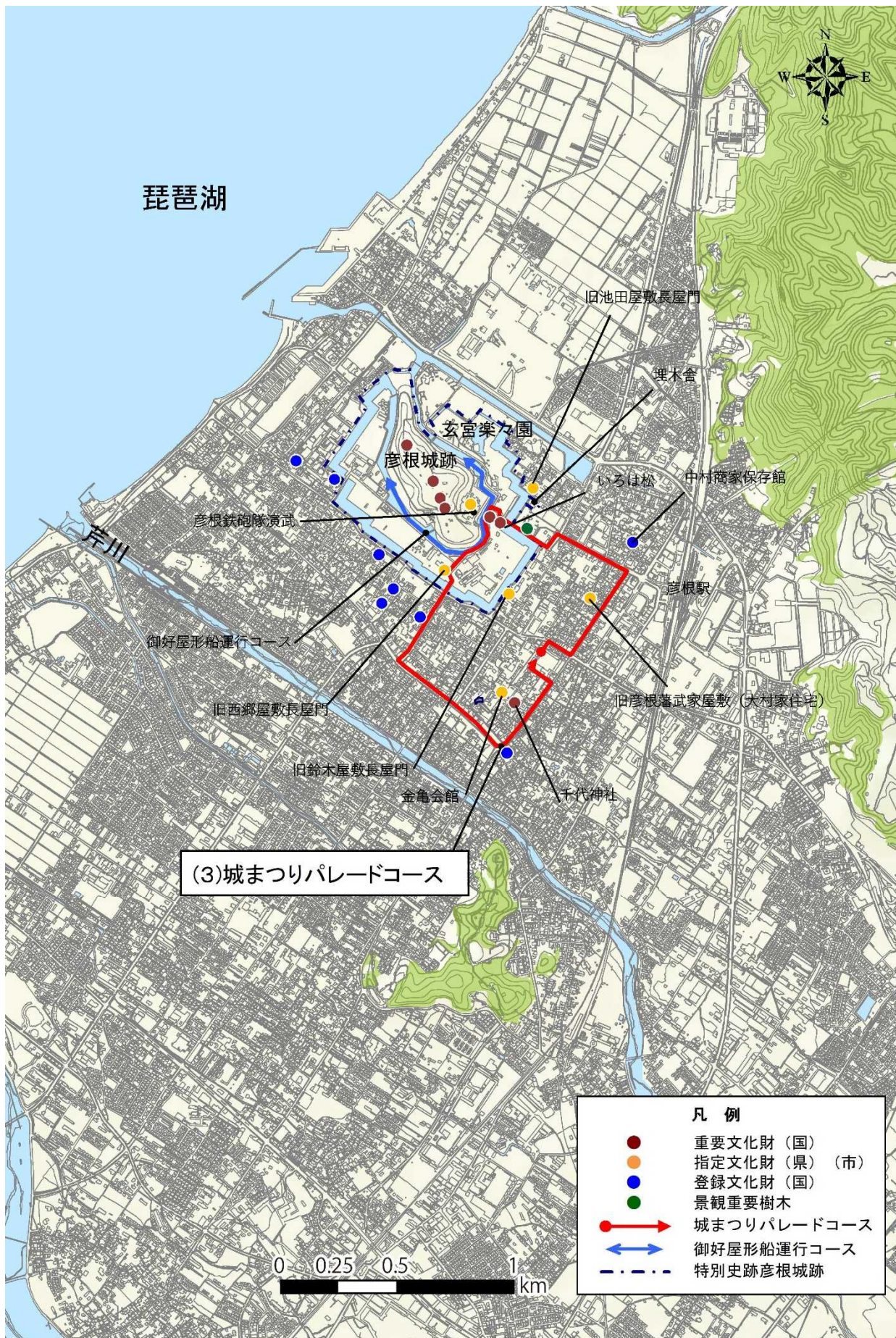
彦根鉄砲隊



彦根城の内堀沿いを運行する「御好屋形船」



「御好屋形船」絵図（彦根城博物館蔵）



(3) 彦根の「城まつり」

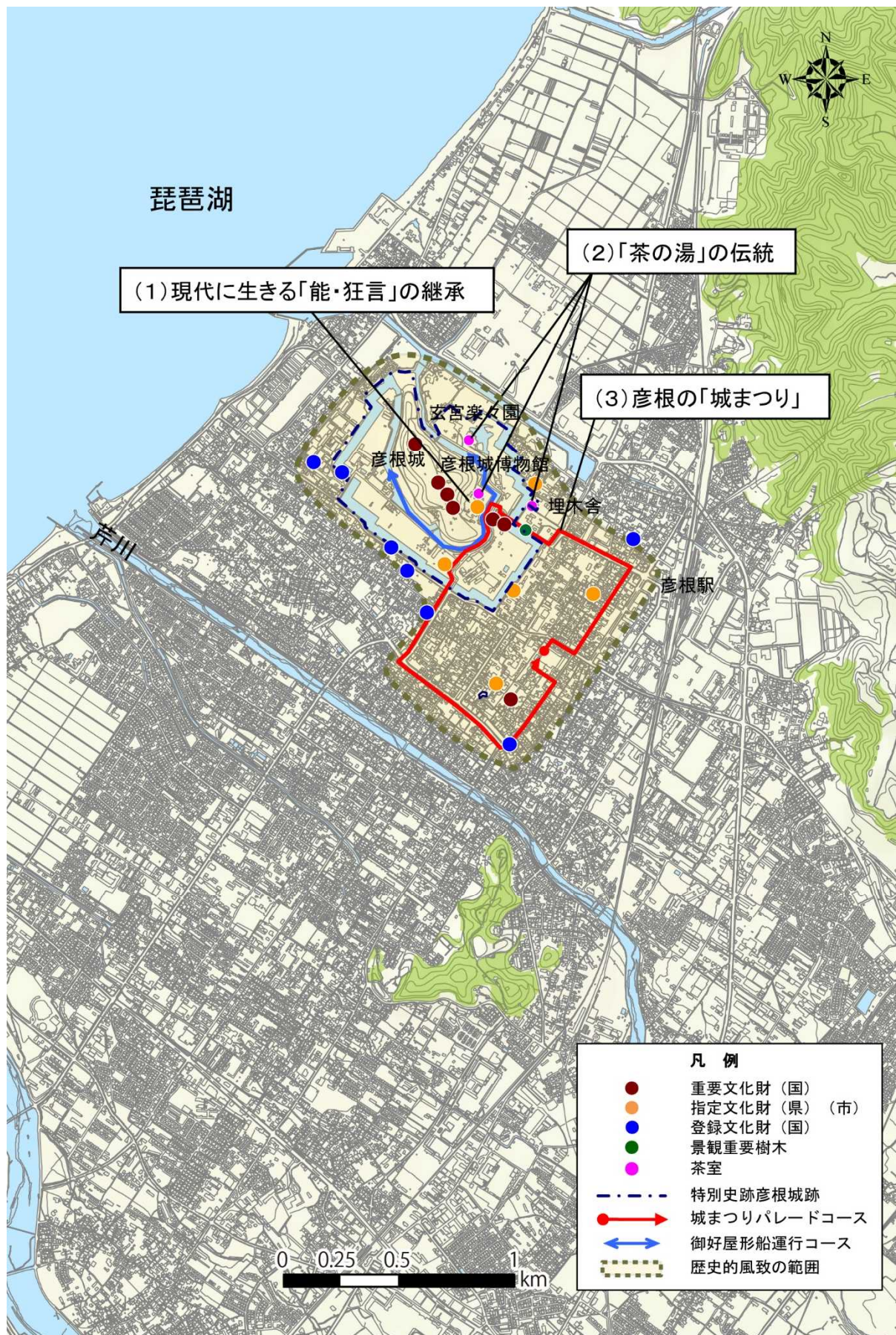
まとめ

彦根では、彦根藩主井伊家により彦根藩の政治が執り行われるとともに、大名の教養として、「能や狂言」や「茶の湯」などが行われてきた。現代では、彦根城博物館の能舞台で発表を行う体験学習能を通して、子どもたちに伝統芸能を広く伝承する取組みが継続して行われている。

茶の湯においては、井伊直弼が創設した茶の湯の道統を継ぐ団体が健在であるなど、大名茶の系譜を引く茶の湯文化が今日まで息づいている。また、小学生を対象に表御殿を復元した彦根城博物館復元木造棟において、茶の湯の体験学習の取組みも行われている。

佐和山神社の祭礼である佐和山まつりが起源とされる「城まつり」では、甲冑に身を包んだ人々が旗印を掲げて勇壮なパレードをする大名行列や古式砲術演舞があり、沿道に多くの観光客が訪れる彦根の秋の風物詩として定着している。

このように、旧城下町の歴史的建造物とともに伝統芸能や伝統文化の継承によって、彦根藩主井伊家の大名文化にみる歴史的風致が形成されている。



1 彦根藩主井伊家の大名文化にみる歴史的風致

2 城下町の伝統にみる歴史的風致

(1) 足軽「組」の結束－足軽屋敷

彦根城下の足軽屋敷は、城下町のもっとも外側に、城下を取り囲むように屋敷を連れ、彦根城と城下町を守備する役割を担っていた。彦根藩の足軽は、慶長期に中藪組 6 組と善利組 12 組が設置されたのを皮切りに、元和期には加増に伴う足軽増強により善利組 8 組と上組 1 組を設置。同様に寛永期には、切通組 3 組・中組 4 組・上組 2 組がそれぞれ新たに設置された。このように彦根藩の足軽組屋敷は総体として江戸時代の早い段階に整えられた。

中でも善利組の規模は大きく、その屋敷地は第 4 郭の南、外堀と善利川の間の東西約 750m、南北約 300m を占めた。幕末期には、戸数およそ 700 を数えた。間口 5 間（約 9 m）、奥行 10 間（約 18m）ほどの敷地に、木戸門と堀に囲まれた小さいけれど武家屋敷の体裁を整えた建物が連綿と続いた。建物内は、土間をへて玄関・台所・納戸・座敷の 4 部屋が「田」の字形に連なり、8 畳の座敷には、床があり庭を望むことができた。藩によっては「足軽長屋」も多い中、彦根藩の足軽屋敷は、門を構えた庭付き一戸建てで、小さいながらも武家屋敷としての体裁を整えた構えであった。

その事例として、平面図に示した旧彦根藩足軽組屋敷（善利組）住宅は、善利組の西寄りの旧 14 丁目の通りの東側に位置し、通りを北から入って中筋の角から 3 軒目の屋敷で、通りに面して門と堀を構えている。建物は、棟札が発見されていないが、建物の風化具合から江戸末期の建築と考えられる。主屋は、切妻造り瓦葺き、平入りで、棟を通りに直角におき、前面妻から下屋を出し、外壁は堀と一体化している。規模は、桁行 5 間、梁間 3 間。建築年代は、構造材の状況から、江戸時代末期といえる。現況の平面構成は、4 列 8 室からなり、1 列目は浴室と新台所、2 列目は洋室と「だいどこ（4 畳半）」、3 列目は出入口と「なかのま」4 列目は「つぎのま（6 畳）」と「ざしき（8 畳）」および入口脇の「つぎのま」に続いて「げんかん（2 畳）」が取り付いている。1 列目と 2 列目の洋室部分は、もとは土間で、昭和になってから現在の姿に改造されているが、3 列目と 4 列目は当時のままである。50 坪前後の敷地に門と堀を構え、「ざしき」は 8 畳で床の間を備え、差鴨居の横面に溝をつけて長押風に仕上げている。さらに、賓客を迎える「げんかん」を通常の出入口とは別に設けるなど、武家の格式を保っており、善利組足軽屋敷の姿を良好に留めている建物である。この足軽組屋敷以外の建造物（足軽屋敷指定物件一覧参照）も概ね、建物配置や平面プランなど類似しており、善利組足軽屋敷のまちなみ景観の形成に大きく寄与する歴史的建造物である。



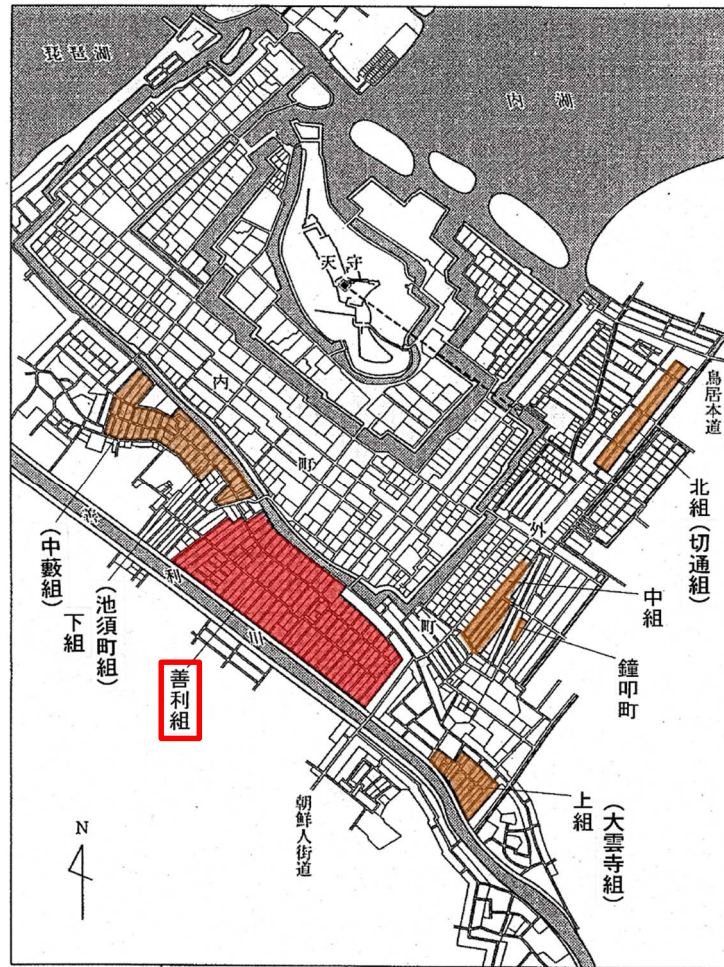
芹川堤防より
足軽屋敷を見る

このような特徴的な佇まいが、今日でも数を減らしつつ存在し、1間半の狭い道筋に沿って足軽屋敷の町割りの静かな住宅街として、そこに住む人々と共生している。今も足軽の末裔の人々が比較的多く居住しており、江戸時代の足軽「組」を継承する単位としてまとめ、各種の会合や集会、清掃や防火防災活動、そのほかの自治活動が熱心に行われている。このような組単位の活動は、江戸時代からみられ、元禄10年(1697年)に城下の南西地域で発生した大火により同年3月9日付けの『井伊直興書下』で城下の火消体制の見直しが指示され、足軽組が城下の火消体制の中に組み込まれ、組ごとの役割分担が定められた。そして、今も組を単位とする定期的な訓練に生かされているとともに、各家の玄関には、必ず赤い防火用バケツを配備している。一方で狭い路地は、車の往来が少なく、人々の会話が飛び交う絶好の社交の場であり、路地を遊び場とする子どもたちも見られる。

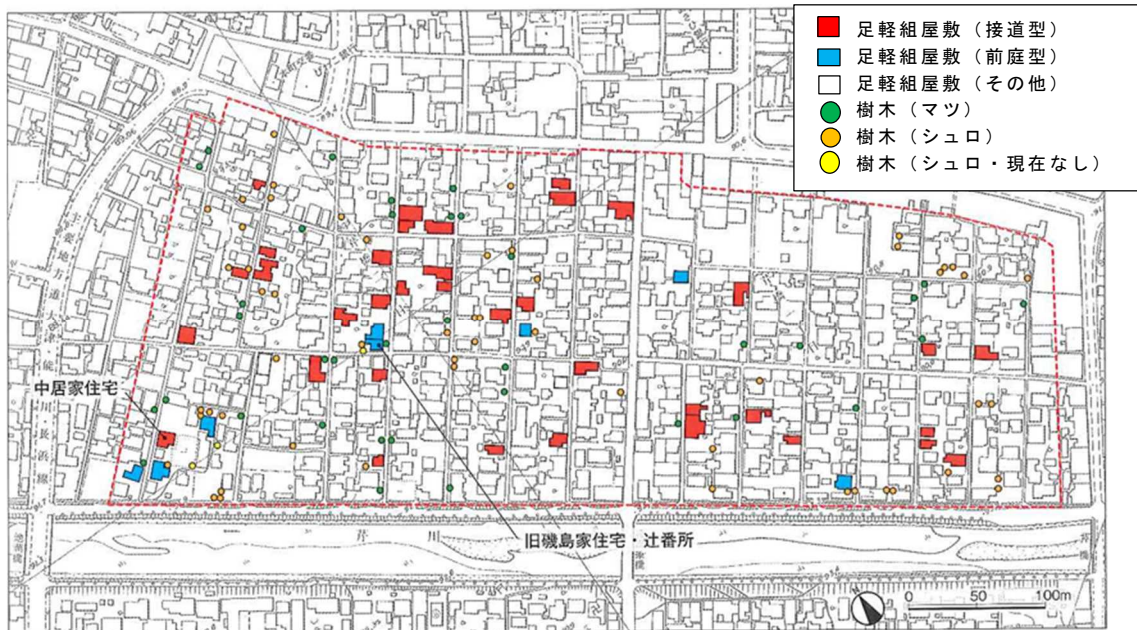
旧善利組足軽屋敷の家屋は、実際に調査を実施すると基本的な間取りは同じであっても、木戸門^{きどもん}や塀のすぐ内側に主屋が接する接道型と前庭を設ける前庭型、平入りと妻入りに分類されるなど、彦根藩の作事方がその時々で現代で言う官舎として建てているため一様ではない。ただし、それらの歴史的建造物が、今日なお東西約750m南北約300mの間、通りの左右に整然と家並みを形成しており、そこで営まれる人々の活動とともに、良好な市街地の環境を形成している。



足軽屋敷内での
防災訓練



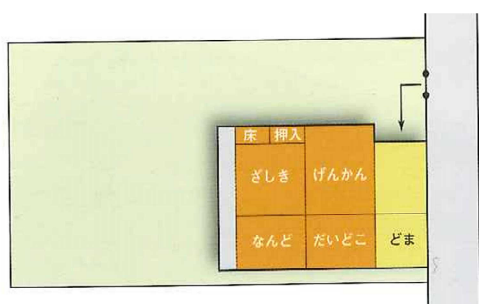
彦根城下の足輕組屋敷の位置



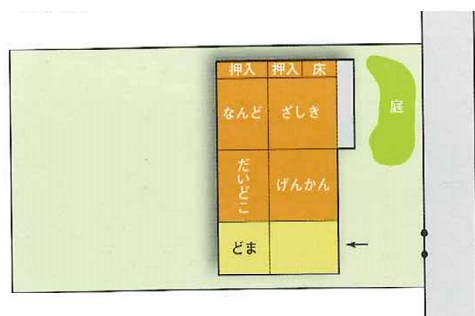
善利組屋敷 現況図（資料：新修彦根市史第10巻）



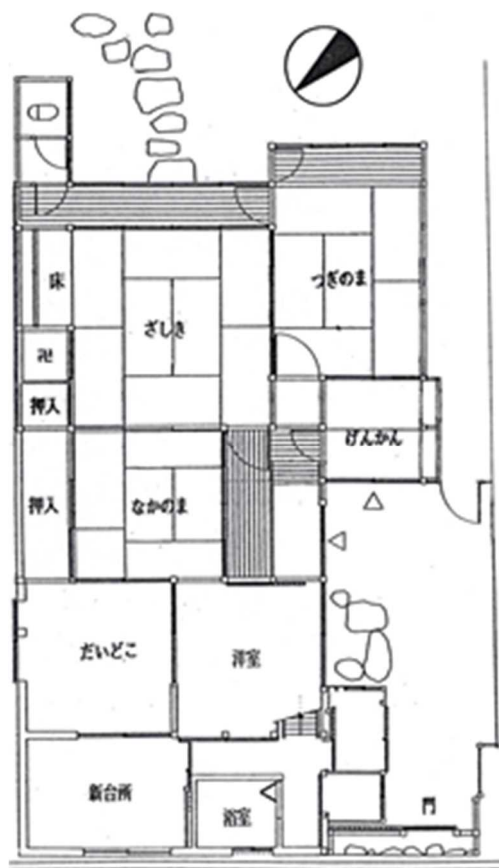
現在も残る善利組足軽屋敷



接道型



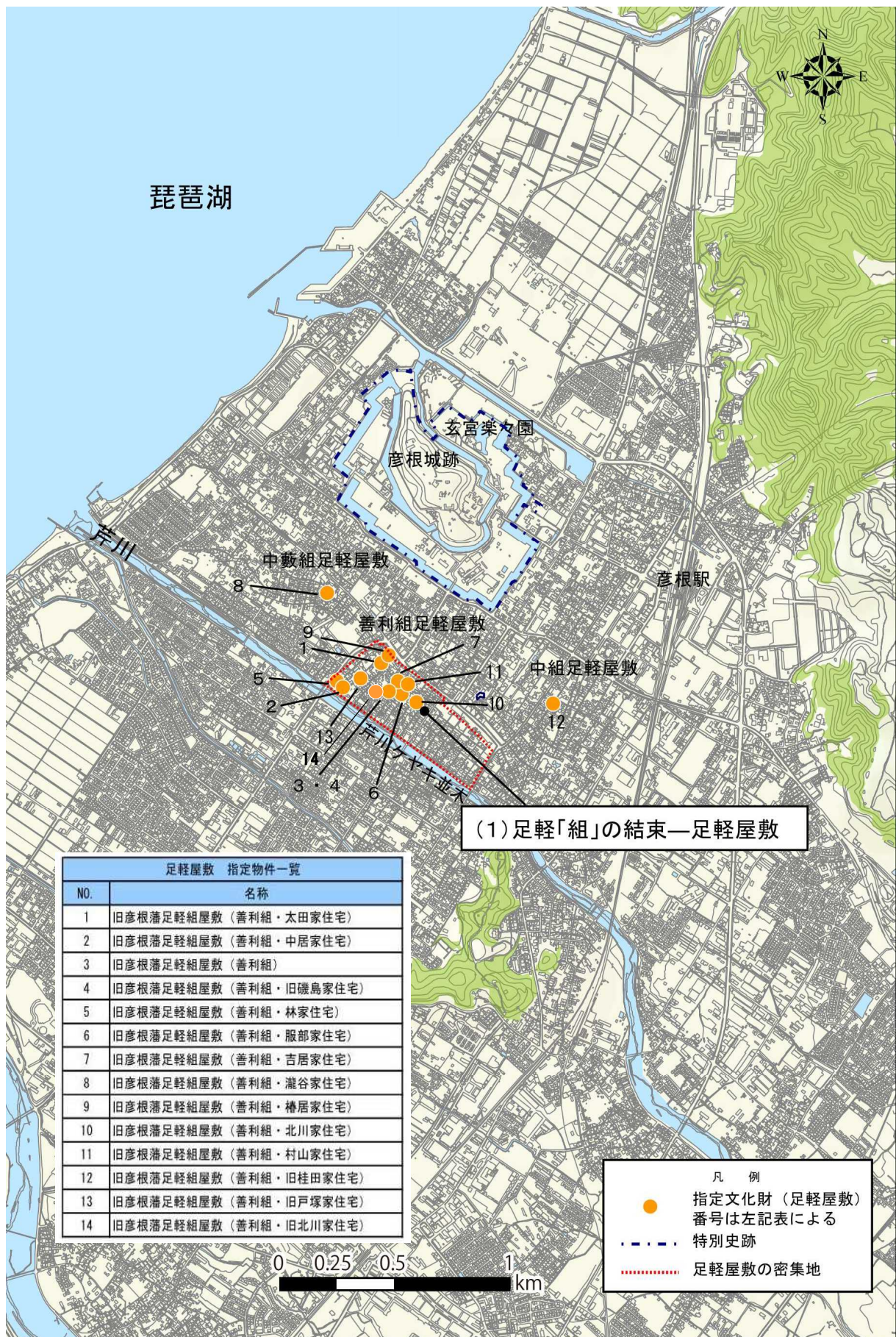
前庭型



道路

善利組屋敷の分類
(資料：新修彦根市史第10巻)

旧彦根藩足軽組屋敷（善利組）
住宅配置図兼1階平面図



(1) 足輕「組」の結束—足輕屋敷

（2）城下町の「伝統工芸」「商い」の継承

彦根城の南東、芹川沿いの七曲がりと呼ばれる地域には、江戸時代の創業という仏壇店が軒を連ね、現在も「彦根仏壇」の伝統技術が息づいている。

七曲がりとは、朝鮮人街道からの分岐点にあたる橋向町から後三条町（現新町）、善利中町（現芹中町）、大橋町、岡町（現元岡町）、沼波町までの中山道の高宮宿方面にいたる彦根道に沿って築かれたまちなみである。前方を見通せないように通りを幾度か屈曲させているところから、七曲がりと通称されたものであり、天保7年(1836年)に作成され、その後明治初期まで加筆修正が加えられたとされる『彦根御城下惣絵図』にも、今と変わらない町割りが描かれている。正保元年(1644年)に町割りが行われ、初期には古鉄屋・塩屋・道具屋などが多かった。現在も、江戸時代に建築された村岸家住宅などの町屋が残る。やがて仏壇関連の職人が集住するようになり、今日の仏壇街に至っている。近年は、家具調の小形仏壇の開発など、若い職人の感性による商品開発も活発になっている。

彦根仏壇の発生については諸説あるが、元禄8年(1695年)の『大洞弁財天祠堂金寄進帳』で、彦根町方で^{ぬし}塗師が12戸確認でき、そのうち2戸は大橋町、1戸は善利中町にある。また、嘉永6年(1853年)の『川原町本家借屋家並五人組帳』には、仏壇職、^{かざりしよく}鏝職がそれぞれ1戸あり、幕末には仏壇職が存在していたことがわかる。そして、日本画家で郷土史家であった上田道三氏^{うえだみちぞう}が明治41年(1908年)当時の商工業者の資料をみて描いた大絵図では、七曲がり付近に仏壇屋の名前をみることができ、そのうちいくつかの仏壇屋は、現在もこの通りで商いを続けている。



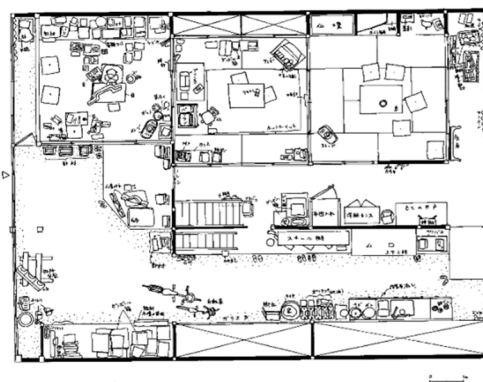
七曲がりのまちなみ



村岸家住宅（江戸時代建築）



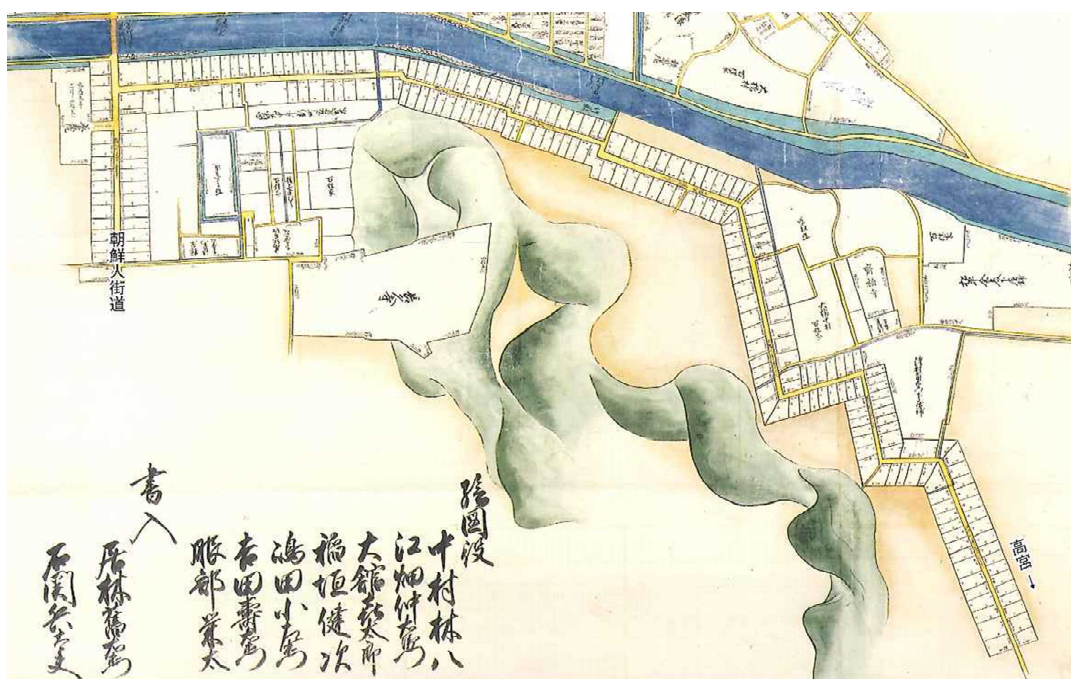
彦根仏壇の作業工程（彫刻）



仏壇職人の町家平面図

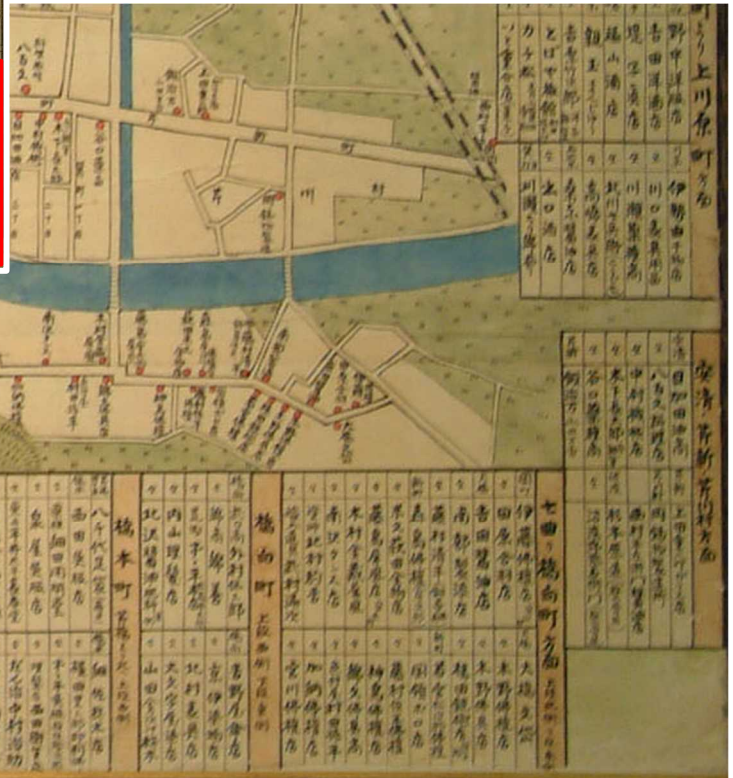
（新修彦根市史（民俗編）より転写）

彦根仏壇は、木地、宮殿、彫刻、鍔金具、漆塗、蒔絵、金箔押の7部門の各職人が仕事を分担して制作しており、これを「工部七職^{こうぶしちしよく}」と呼び慣わしている。各職人が制作した部材を問屋が組み上げ、仕上げを施して販路に流すのである。したがって、部材の多くは、職人から職人へ移動しながらしだいに完成していくため、職人はおのずと近くに集住し仏壇街を形成した。そのことは今も変わらず、仏壇職人の作業の場となっている。歴史的建造物が連綿と続く七曲がりの中ほどに位置する仏壇製造販売の商店は、中二階に白漆喰で虫籠窓を設け、1階を住居兼作業場スペースとする典型的な店構えである。玄関を入ると板敷きの作業場と土間が広がっており、仏壇の屋根となる部分や台座の部材、納品用の段ボール箱などが置かれている。こうした仏壇店が、七曲がりの通りの両側に数多く存在し、伝統的な技術と歴史的な景観が一体となって今日に継承されており、良好な市街地を形成している。



彦根御城下惣絵図（七曲がり付近）

彦根城博物館所蔵の図に加筆



明治 41 年（1908 年）7 月 湖東之光社発行 彦根市街及商工業者一覧 上田道三写
 一方、江戸時代には、城下町の外堀の外側に位置する外町の中心的な町として河原町があった。現在の花しょうぶ通りは、江戸時代の旧町名では、川原町、上川原町（現河原二丁目など）、安清町（現河原一丁目など）にあたる。元禄 8 年（1695 年）の『大洞弁天祠堂金寄進帳』によると、河原町は煙草屋 34、油屋 16、米屋 15、菓子屋 9 など 41 種、安清町では煙草屋 10、塩屋 8、紺屋 6 など 31 種の生業で賑わっていたと記され、日用具を売る店が多く見られる賑やかな町であったが、今日でも江戸時代以来の歴史的建造物が数多く残り、花しょうぶ通り商店街として、歴史的建造物の建物内で昔ながらの魚屋・酒屋・八百屋などの商いが行われている。



花しょうぶ通りの酒店



花しょうぶ通りの魚屋

重要伝統的建造物群保存地区（河原町芹町地区）内の花しょうぶ通りの入り口近くに店を構える魚屋は、新鮮が売り物。中二階に出格子窓を設けた伝統的な店構えの 1 階では、馴染みの客との間に威勢のよい会話が弾む。江戸時代には、琵琶湖の幸などの魚介類は船

町から城下を経て本町近くの魚屋町に一度集積された。魚屋町には、今も入口に井戸を残す家が多いが、城下の魚屋は、魚屋町の魚問屋を介して仕入れ、店頭売りや荷い^に売^りを行^った。酒屋は、大きな店構えの造り酒屋である。創業は、享保年間とされ、安政4年（1857年）「布市」という屋号で布を商っていたといい、明治5年（1872年）には造り酒屋を営んでいたことが記録に残されている。奥には幾つもの土蔵が並び、酒の甘い香りが漂う主屋とともに重厚な造りが特徴である。

また、彦根では、11月下旬の数日間、旧城下町の古いまちなみを残す各商店街が、それぞれ趣向を凝らして「^えび^こす^講」と称して大売出しを行う。『新修彦根市史』によると、戦時中に中止されていた彦根^えび^こす^講の再開をめざし、昭和21年（1946年）11月に彦根復興まつりが開催され、その後昭和23年（1948年）には、戦後はじめての^えび^こす^講が開催されたとある。現在でも歩行者天国として開放された道路では、フリーマーケットや屋台などを繰り出して開催している。かつて「彦根の^えび^こす^講は日本一」と言われたほどに賑わった。琵琶湖の対岸からも船を出して買い物客が大勢やってきたという。農繁期を終えた人々が、正月用の衣類や調度などを求めて彦根に集まったのである。



蛭子神社

^えび^こす^講は、朝鮮人街道沿いの橋向町に今もある^えび^こす^{蛭子神社}ゆかりの祭である。蛭子神社は、祭神として事代主神を祀^{まつ}っている。江戸時代にこの地に養春院という寺があり、明治初期の神仏分離により養春院が廃寺となり、鎮守5社のうち蛭子1社が残された。蛭子神社の敷地に、嘉永6年（1853年）に造られた常夜灯がある。拝殿は、建物内の額によると「昭和2年現堂を建つ」と記されていることから、昭和2年（1927年）の建築であると伝わる。拝殿にある社殿は、一間社流造、間口3尺8寸、奥行3尺の建築で明治以前のもので伝えられている。例祭は、11月20日であり、現在でも各商店街や振興組合の役員が正装して蛭子神社にお参りした後に、^えび^こす^講が始まる。古くは「^えび^こす^講」と書き、彦根では「^えべ^こす^こ」と発音した。



昭和11年（1936年）のようす

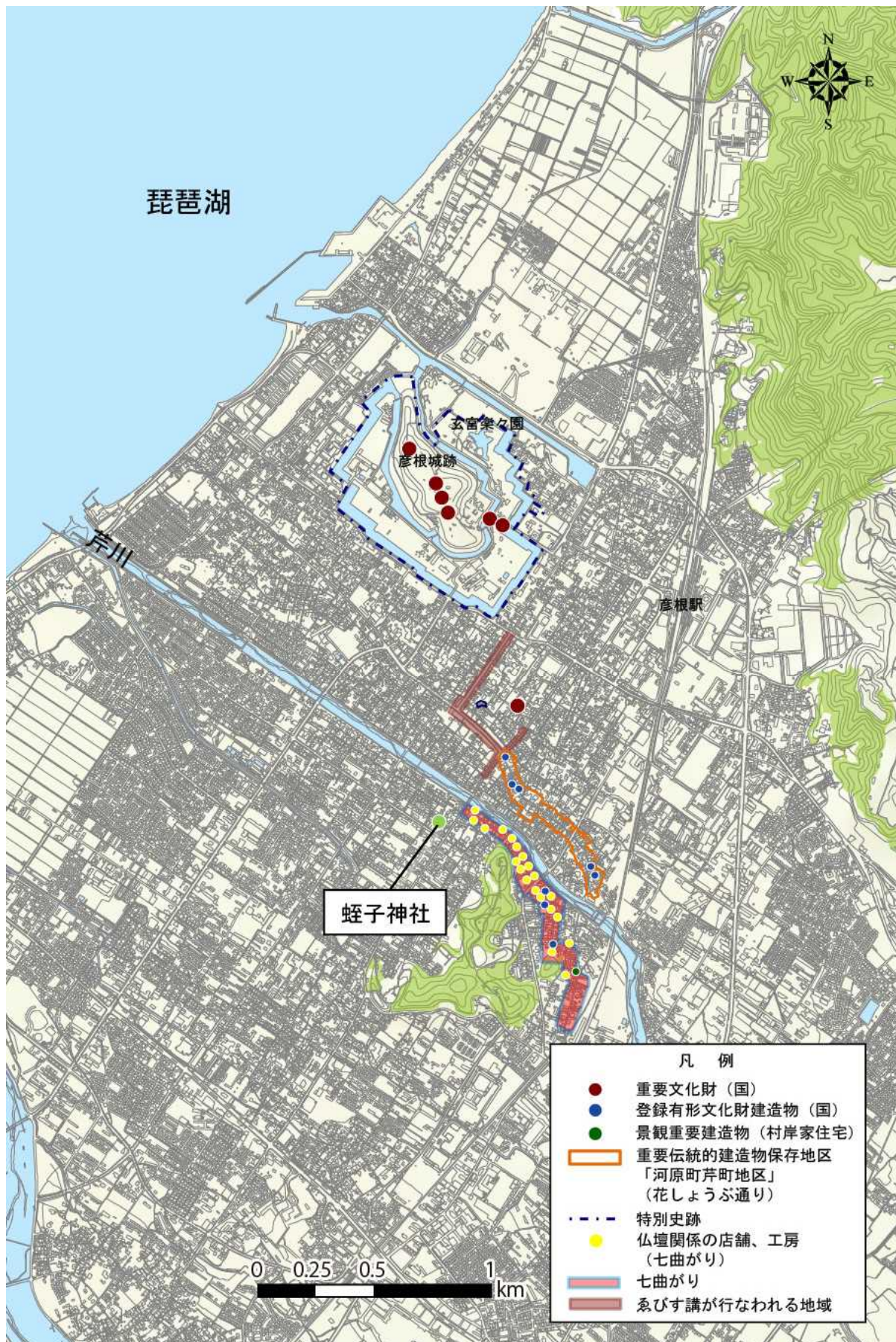


昭和後期頃のようす



現在のようす

「^えび^こす^講」の賑わい



（2）城下町の「伝統工芸」「商い」の継承

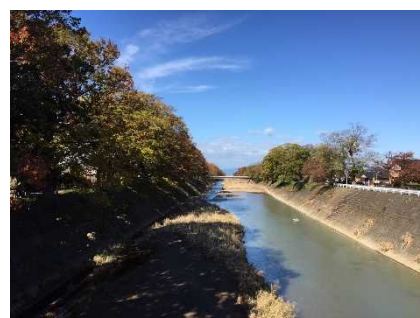
（ 3 ） 城下町の伝統行事

善利組足輕屋敷のすぐ外側を流れる芹川は、彦根城の築城時に城下町の排水を良くするために大土木工事を行い、延長およそ 2 km を新たに付け替えて琵琶湖に直流させた人工河川である。そのため、護岸を補強するため植えられたと伝えるケヤキなどの古木が並木を形成して現存しており、散策や憩いの場として市民に親しまれている。ケヤキの古木には、樹齢 300 年を超えるものもあり、ケヤキ並木越しに見る足輕屋敷のまちなみは、歴史的景観としても優れている。



芹川旧河道復元図（資料：新修彦根市史第 10 巻）

この芹川は、戦後その姿を大きく変えられようとしていた。『新修彦根市史』によると、昭和 41 年（1966 年）から芹川改修工事が始まり、改修工事のため、土手のケヤキ並木が伐採され始めた。こうした動きに市民が立ち上がり、芹川のケヤキ並木の伐採中止を訴える保存運動が起こった。その結果、伐採は最小限に食い止められ、今もその景観が保全されている。現在、ケヤキは市が管理する樹木であるが、地元自治会が主体となって、芹川の草刈りや清掃活動を年に一度実施するなど、地域の人々の活動によりケヤキ並木が維持されている。



芹橋からみた芹川とケヤキ並木

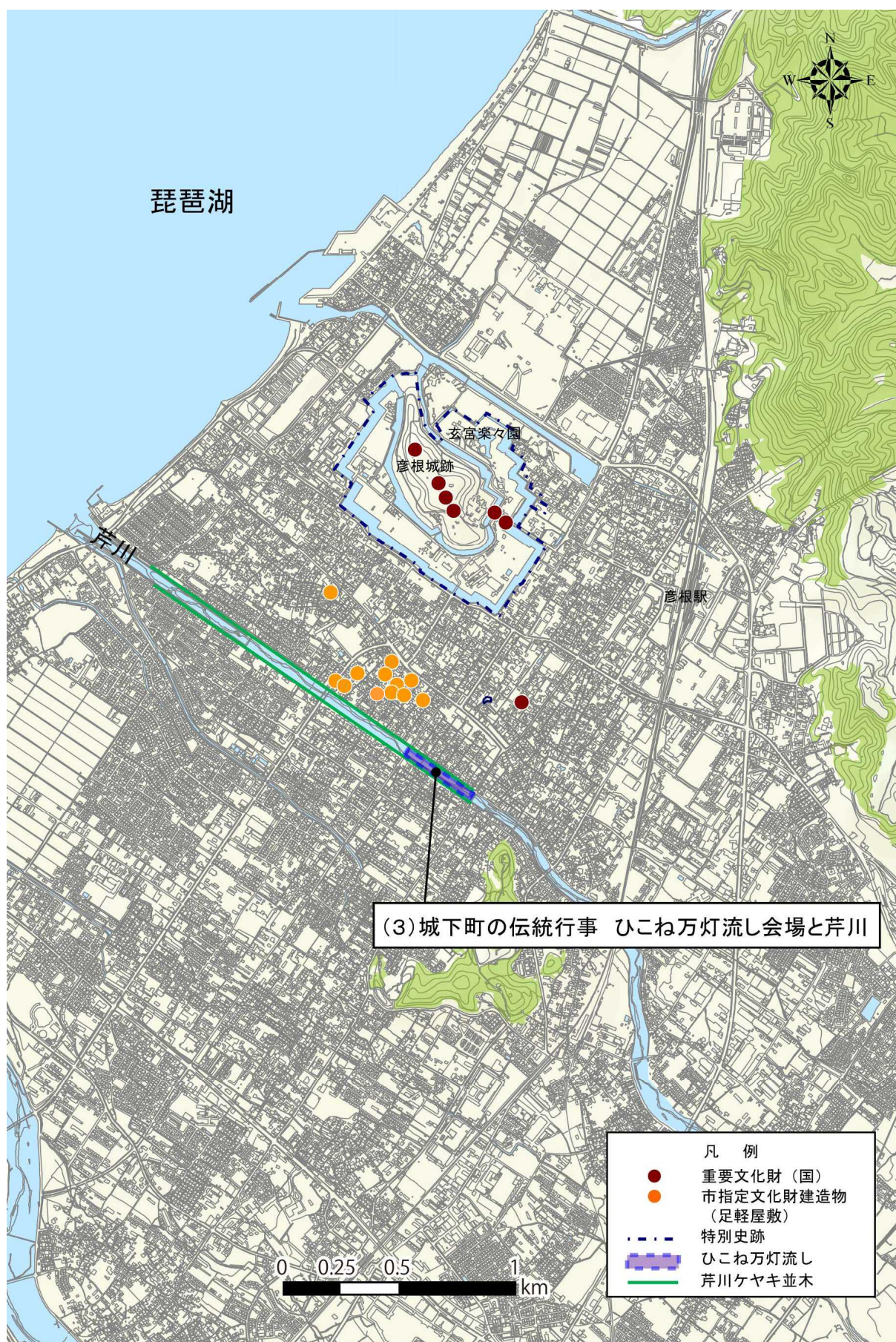


芹川のケヤキ並木沿い
河川一斉清掃

また、夏の盆の時期には、芹川で「ひこね万灯流し」の行事が行われる。地域の人々が諸霊を慰めるため灯籠に送り火の灯りを入れ、芹川に流す。千の灯籠が川面に美しく映え、幻想的な夏の風情をつくっている。霊をまつる盂蘭盆会に起因し、門外に火を送ることが転じて万灯を流し先祖の霊を慰めることになったと考えられている。江戸時代から琵琶湖畔で行っていた行事であったと伝わり、昭和 30 年（1955 年）8 月 1 日の新聞記事では、当時は長曾根護岸で行われ、趣向をこらした装飾船が湖上で華麗を競った。その後昭和 56 年（1981 年）8 月 6 日には芹川で行うようになり、現在も夏の行事となっている。



「ひこね万灯流し」



（3）城下町の伝統行事

けやきの愛称と四季折々のけやきみちのフレーズ

市制 75 周年を年記念して、樹齢 350 年を超える大木のけやきについて、「芹川けやきみち」により一層親しみを持っていただき、多くの観光客の誘導を図るため、けやきの愛称と四季折々のフレーズを募集し決定した。

けやきの愛称

- ① 大老の樹 大王の風格があることが特徴であり、歴代彦根藩主が多く務めた「大老」を想起するものとして決定。
- ② 赤鬼の樹 赤みがかった角のような枯れ枝があり、鎧や兜をイメージさせる。井伊直政の甲冑の色から、「井伊の赤鬼」と言われ、その歴史的背景から決定。
- ③ 開国の樹 樹木の大穴が「風穴を開ける」という成句を連想させ、日本の「開国」を決断した大老・井伊直弼の歴史的功績をたたえる意味を込めて決定。



四季折々のけやきみちのフレーズ

- | | |
|---|--------------------|
| 春 | さくら咲く 春らんまんの けやきみち |
| 夏 | せせらぎに 風の音涼し けやきみち |
| 秋 | 石だたみ もみじ舞いちる けやきみち |
| 冬 | 積もる雪 歴史を語る けやきみち |



（４）城下町に息づく寺社信仰

彦根には、藩政時代から続く寺院が多くみられる。旧寺町での集中的な配置のほか、城下の防御を考慮して内町と外町に計画的に配された寺院は、今も多くの檀家衆によって支えられている。その中には藩政時代からの檀家も多く、寺院での活動が年中行事にもなっている。元旦の修正会^{しゅじょうえ}に始まり、2月の涅槃会^{ねはんえ}、盆には「施餓鬼^{せがき}」、秋には「御十夜^{じゅうや}」や「報恩講^{ほうおんこう}」など宗派ごとの行事がさまざまに展開され、檀家は事前の奉仕作業、当日のお参り、後片付けなどを行って寺院を支え守る。彦根城下のように寺院が林立する地域では、各所で行事が行われ、その活動が城下町の風情ともなっている。それは、世代を越えて引き継がれ今日に至っている。

旧元川町の浄土宗宗安寺は、井伊家ゆかりの寺として、大坂夏の陣で彦根藩士に討ち取られた豊臣方の名将木村重成^{きむらしげなり}の首塚があることで知られ、山門は佐和山城の大手門を移築したと伝える。また、朝鮮通信使の正使・副使・従事官の三使の宿泊所に充てられており、通信使から贈られたと伝える高官像などが残っている。通信使一行が彦根に旅装を解く日は、通信使との筆談唱和を求める人々で一帯が大いに賑わったという。

一方、彦根では神社の伝統に支えられた祭礼も数多く催される。

城下の西側に位置する北野神社は、彦根城の築城前に彦根山に存在した彦根寺を琵琶湖岸の現在地に移した際に、井伊家2代当主直孝^{なおたか}が幼少期を過ごした上野国碓氷郡後閑村^{うすいごかんむら}（群馬県安中市下後閑）の北野寺に鎮座する天神を勧請したことに始まり、現在の社殿は、寛政12年（1800年）に再建された権現造の社殿である。

北野神社では1月に「十日ゑびす祭」が催され、参拝客に甘酒やお神酒が振舞われ、餅まきや福笹^{ふくざさ}を買い求める人で賑わう。社伝によると、境内地の祭神であった蛭子大神^{えびす}を昭和30年（1955年）、彦根の意気を昂揚するために行ったのが始まりとされる。また、5月には、明和2年（1765年）成立の『江左三郡録^{ごうささんぐんろく}』にも記述のある「天神祭^{てんじんまつり}」が2日にまたがって催される。前日（5月2日）に宵宮祭^{よいみやさい}、当日（5月3日）に本殿祭^{ほんでんさい}と神幸祭^{しんこうさい}がある。宵宮祭の午後には、15町を鐘と太鼓でふれ回る「宵



宗安寺山門



北野神社本殿



北野神社の「十日ゑびす祭」



北野神社祭礼行列

宮ふれ太鼓」に始まり、当日は本殿祭、神社の御鳳輦^{ごほうれん}を先頭に御旅所^{おたびしょ}を往復する渡御^{とぎょ}（神幸祭）と続く。渡御には、稚児行列^{ちご}や氏子^{うじこ}11町の子ども神輿^{みこし}が加わり、総勢は500人を越える。

5月3日の「天神祭」の渡御では、現在の城町から本町^{ほんまち}界限を經由する。周辺には、城下町の西の門にあたる長曾根口御門跡やかつて魚屋町^{うおやまち}・桶屋町^{おけやまち}・職人町など町人が職業ごとに分化配置された町がある。今でも随所にその面影を残し、旧広田家（納屋七）住宅などの歴史的建造物を認めることができる。中でも魚屋町には、入口に魚を洗う井戸を残した例が多く、10棟からなる魚屋町長屋の存在は特に貴重である。こうした建物の前を渡御の一行が通過する景観は、彦根に固有の歴史と伝統を明瞭に示している。

また、城下東側に位置する千代神社^{ちよじんじゃ}は、寛永15年（1638年）に造営された古社であり、三間社流造りの本殿が国の重要文化財に指定され、天宇受売命を祭神とし、芸能の神様として多くの氏子に支えられ、人々の崇拝を集めている。

千代神社でも、明和2年（1765年）成立の『江左三郡録』にも記述のある祭事が、5月5日の春季例大祭で「神幸渡御^{しんこうとぎょ}」が斎行される。前日の4日の宵宮祭の午後には、鐘と太鼓でふれ回る「宵宮ふれ太鼓」があり、当日5日の本殿祭では、御鳳輦^{ごほうれん}と神輿が市内を練り歩き、行列は総勢300人を超えるとともに多くの人出があって盛況である。神輿は、京町・旭町・佐和町・立花町・中央町などを練り歩く。江戸時代には、外堀沿い近辺に位置し、比較的武家屋敷の多かった地域である。今日でも昔ながらの通りには、藩校の講堂が移築され西本願寺の経堂として使用されていた金亀会館や元酒小売店舗でつし2階の伝統的形式の建造物である中村商家保存館をはじめ歴史的建造物が残っており、神輿の賑わいが一体となって良好な市街地の景観を形成している。



千代神社本殿



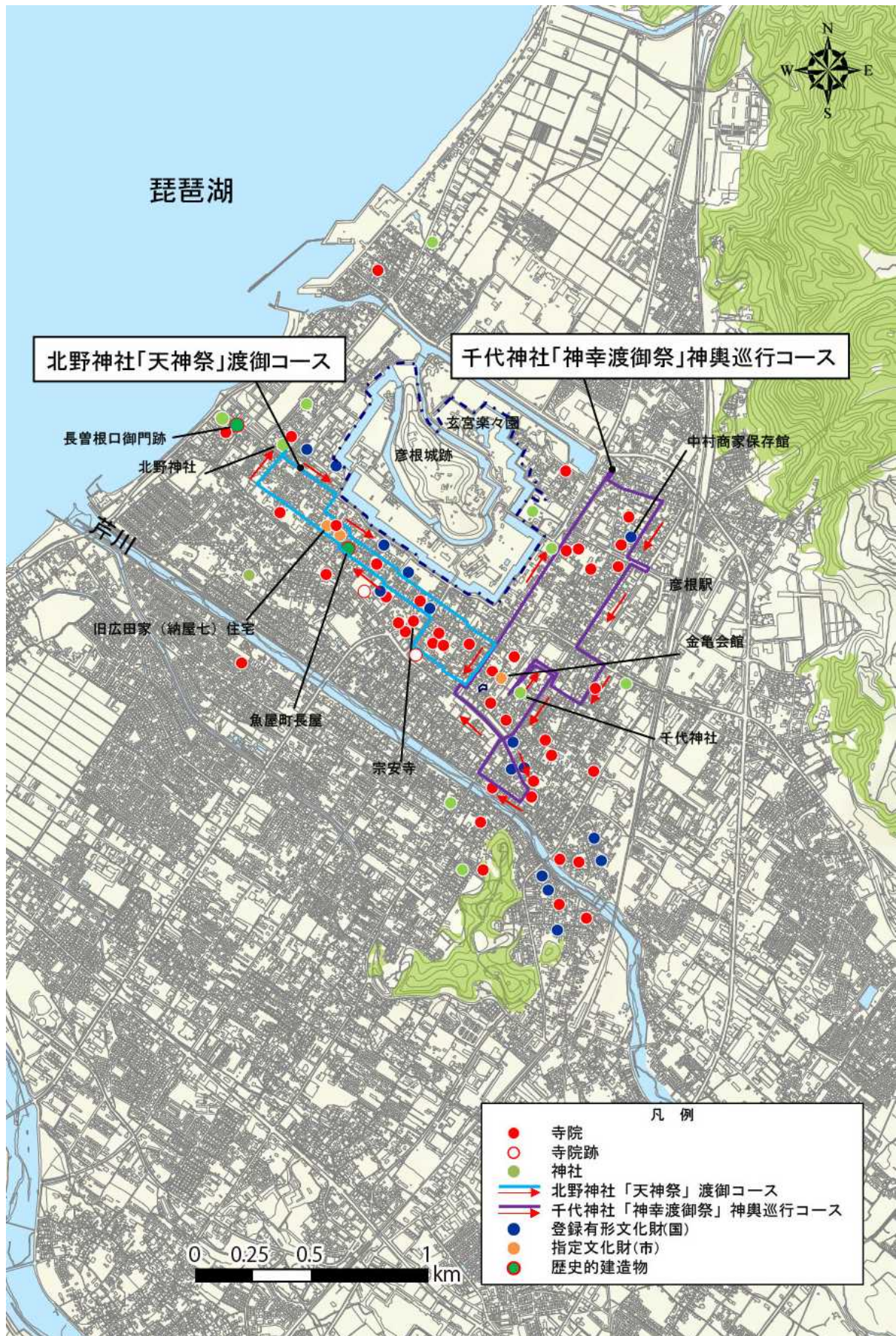
千代神社祭礼行列



金亀会館



中村商家保存館



(4) 城下町に息づく社寺信仰－城下町の寺院・神社

(5) 「時報鐘^{じほうしょう}」の音風景

彦根城に登城する途中、本丸下の太鼓丸から毎日決まった時間に鐘の音が聞こえる。江戸時代から絶えることなく、朝から 3 時間おきに、6 時、9 時、12 時、15 時および 18 時の 1 日に 5 回、城下に鳴り響く鐘の音は、「お山の鐘」として市民に親しまれている彦根城の時報鐘である。

築城当初は、鐘の丸に設置され、城下に時を知らせていたようだが、より遠くまで音色が届くように太鼓門近くの高台に移されたと伝えられる。江戸時代の絵図『御城内御絵図』には「鐘突所」と記されている。現在の鐘は、愛知郡長村(東近江市長町)の鑄大工黄地新左衛門ら 5 人により製作されたもので、弘化元年(1844 年)に井伊家 12 代当主直亮が発注したものと伝えている。

廃藩後間もない明治 5 年(1872 年)、彦根城は陸軍省の所管となり、鐘が鳴らず人々が不便を被るようになったが、その後、釣鐘堂使用と鐘の撞き手 2 人の城門通行が許可され、城下に鳴り響く鐘の音が戻った。江戸時代から絶えることなく毎日決まった時間に彦根城からの鐘の音が城下に鳴り響き市民に親しまれている。時報鐘と夏の夕暮れの彦根山一帯のヒグラシの蟬時雨と秋の玄宮園のスズムシ、マツムシなどの虫の鳴き声が聞こえる複合的な音風景である「彦根城の時報鐘と虫の音」が、平成 8 年(1996 年)環境庁の「残したい“日本の音風景 100 選”」に選定されている。この「時の鐘」は、彦根城一帯の景観と鐘の音風景が一体となり、今も江戸時代の音色が時空を超えて聞く人の心に時を静かに刻み、彦根独自の歴史的風致を形成している。

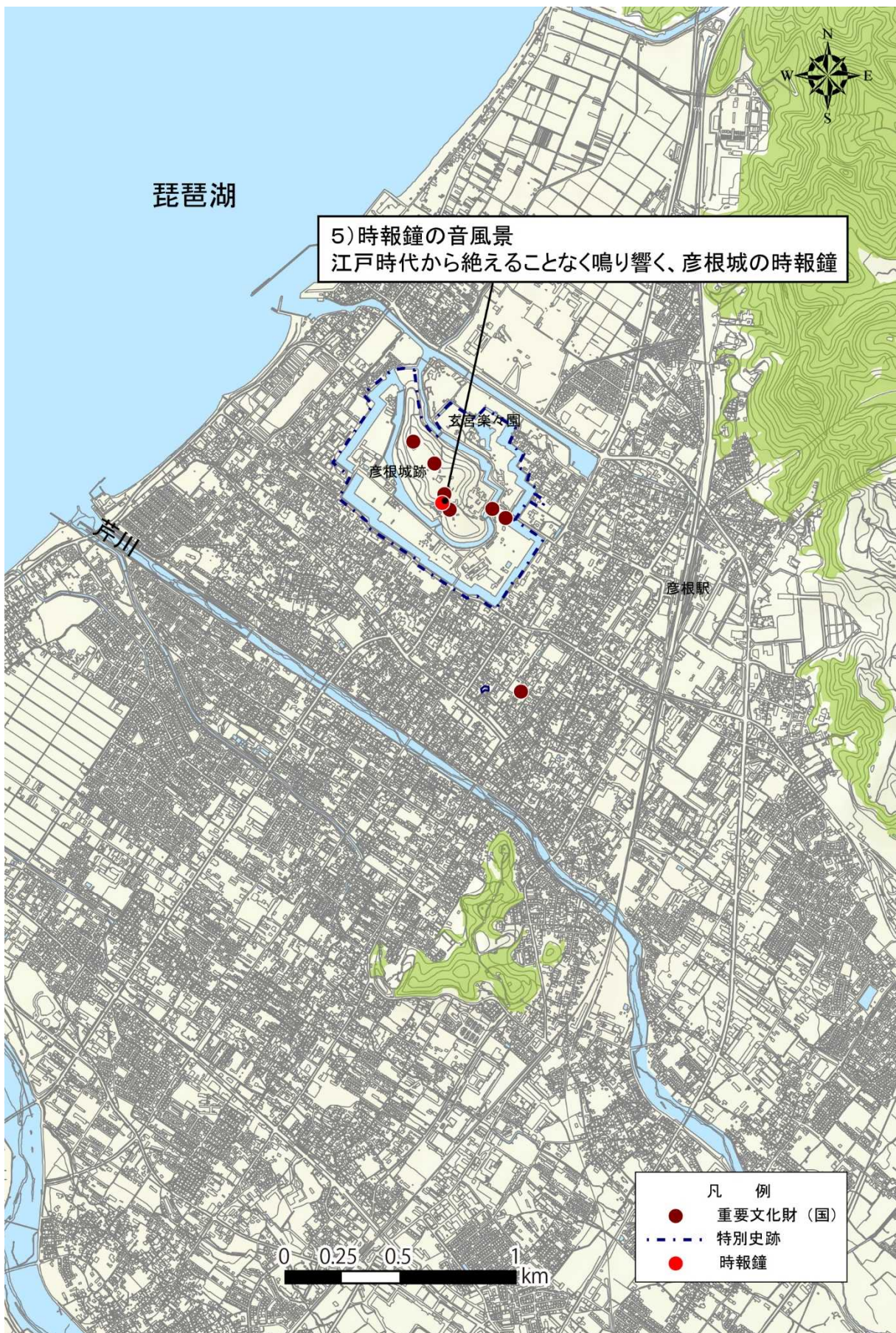


敗戦前の「時報鐘」

(彦根市立図書館蔵)



現在の「時報鐘」

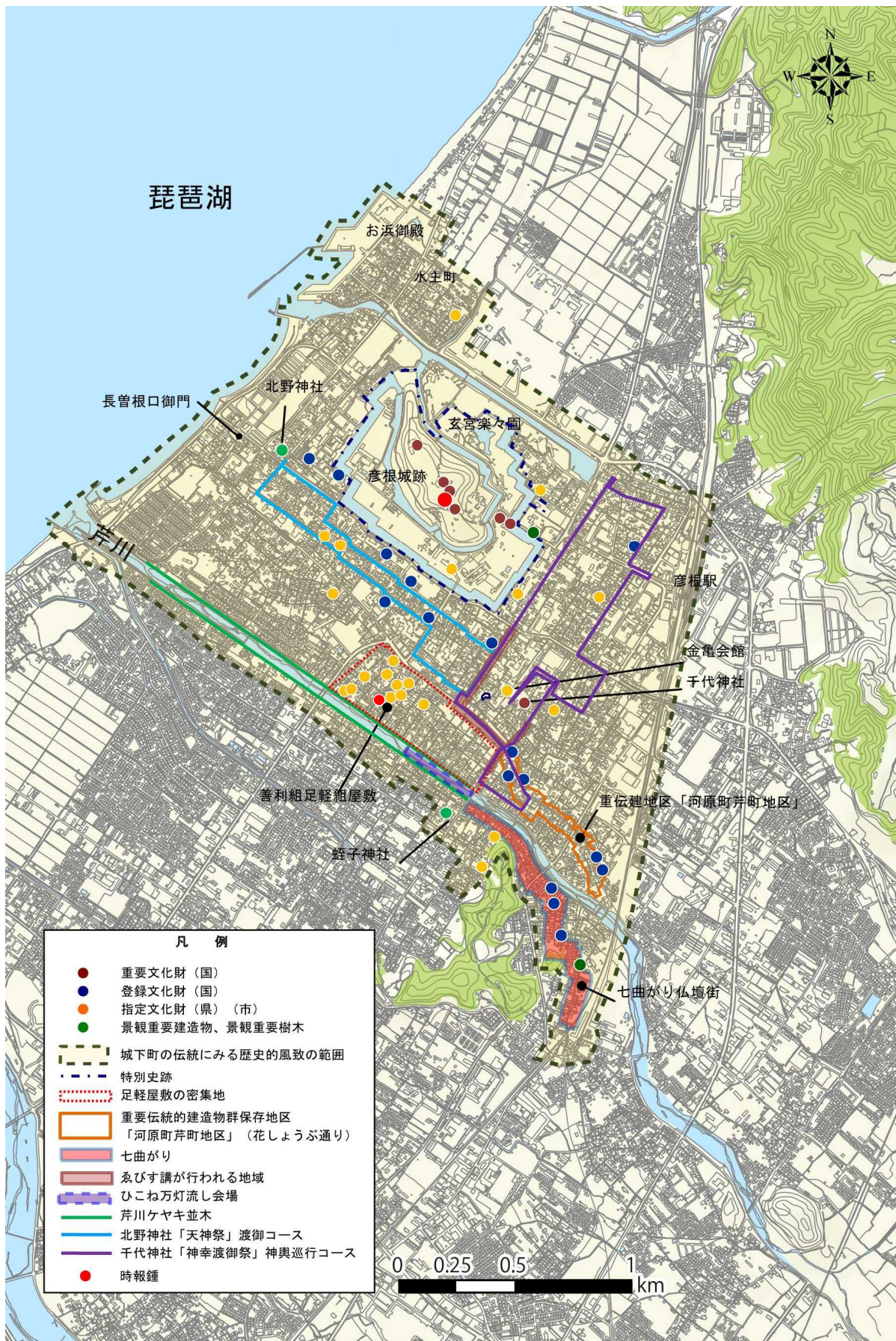


(5) 時報鐘の音風景

まとめ

彦根の城下町は、三重の堀によって4つに区画された。その中の足輕組屋敷（善利組）は、第4郭に位置し、南から北へ1丁目～15丁目に区分されていた。今日もこの旧丁目を単位とする自治活動が行われている。七曲がりは、正保元年（1644年）の町割りの後に仏壇関連の職人が集住するようになり、今日の仏壇街に至っている。近年は、家具調の小形仏壇の開発も活発になっている。河原町は、江戸時代以来の歴史的建造物で昔ながらの魚屋・酒屋・八百屋などの商いをする人たちが健在である。これらの町に接して芹川があり、夏の盆の時期には、芹川で「ひこね万灯流し」の行事が行われる。城下町には、藩政時代から続く寺院が多く、今も多くの檀家衆によって支えられ、寺院での活動が城下町の風情ともなっている。城下町では毎日決まった時間に彦根城の時報鐘からの鐘の音が聞こえる。江戸時代から絶えることなく城下に鳴り響き、その鐘の音は市民に親しまれている。

これらは、往時の面影が色濃く残り、また城下町特有の様々な伝統文化が今なお現代に引き継がれ随所に息づき、城下町の伝統にみる歴史的風致が形成されている。



2 城下町の伝統にみる歴史的風致

3 中山道の宿場町（高宮宿・鳥居本宿）にみる歴史的風致

（1）高宮宿と高宮まつり

高宮の町は、夜になると常夜燈^{じょうやとう}に火が点り、早朝の街道には打ち水が施される。中山道の宿場として古くから多くの人々が往来し、旅人をもてなしてきた人々の思いが引き継がれた町である。街道筋には常夜燈のほか道標^{いちりづか}・一里塚^{いちりづか}・松並木^{こうさつばあと}・高札場跡^{こうさつばあと}・本陣跡^{ほんじん}・脇本陣跡^{わきほんじん}・旅籠跡^{はたご}など、街道や宿場に特徴的な施設や、元麻布商であった加藤家住宅、旧近江商人屋敷である不破家住宅などの歴史的建造物が、今も数多く姿を留めている。

高宮宿は、江戸から 64 番目の宿である。古代犬上郡 10 郷の 1 つ、高宮郷の地である。中世には、荘園が成立し東山道筋に市も立った。その後、高宮氏の高宮城下としての歴史を歩むが、天正元年（1573 年）の小谷城戦で高宮城は炎上し、高宮氏は一族離散してしまう。高宮氏の菩提寺高宮寺には、高宮氏歴代の墓所が現存し、重要文化財木造伝切阿坐像など時宗ゆかりの豊かな文化財を今に伝えている。



高宮神社

高宮が宿場町として設けられたのは、江戸時代初頭からのことである。高宮宿は、宿の石高 2923 石 6 斗 2 升で美濃の鵜沼宿^{うぬま}に次いで高い。高宮宿には本陣 1 軒、脇本陣 2 軒があった。本陣・脇本陣の詳細な絵図が伝来し、本陣の表門が残っている。高宮宿のほぼ中央に、多賀大社への正式な参詣道（表参道）である高宮道（多賀道）が延びている。入口には、石造の多賀大社一の鳥居がある。



昭和 30 年頃の高宮神社の春祭り
（高宮出張所蔵）

高宮の中央付近に位置する高宮神社は、高宮の 17 すべての町民が氏子として崇敬し祭事に関わっている。創建は、鎌倉時代頃と想定されており、古くは十禅師宮^{じゅうぜんじのみや}または山王権現と称したことから、日吉社領であったと考えられている。明治 5 年（1872 年）には、郷社となり今日に至っている。なお本殿の建築形式は、一間社流造り、正面千鳥破風軒唐破風付の間口一間一尺、奥行一間一尺で、延宝 6 年（1678 年）の建築と伝えられており、高欄擬宝珠にその銘が刻まれている。表門は、嘉永 2 年



高宮太鼓祭り 渡御行列の大太鼓
（東出の大太鼓 平成 18 年撮影）

(1849 年) の建築で、棟札を残しており、入母屋造りの三間一戸の八脚門である。

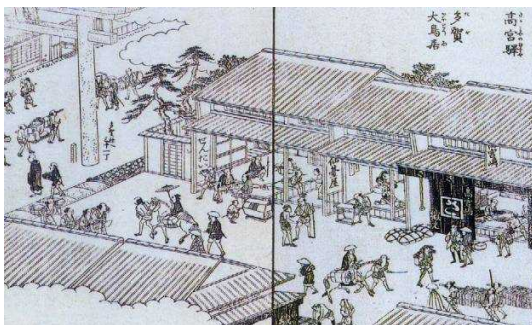
この高宮神社は、春と秋に大祭が催される。中でも春祭りは、「高宮太鼓祭り」とも呼ばれる大掛かりな祭りである。宵宮をへて本祭りの当日は、「^{とぎよ}渡御」と呼ばれる巡行が催される。本町の神輿を先頭に、17 町の町旗・鉦・太鼓が続き、行列の最後を締めくくるのは騎馬の神官や氏子総代たちである。太鼓は、胴回りがおよそ 6 m もある大太鼓を台棒で荷う。総勢 500 人を超える大行列であり、太鼓と鉦の音に人々の歓声が混在して、祭りを盛り上げる。こうした大祭の起源は、明治 3 年 (1870 年) の洪水で資料が流失してしまったため明瞭ではないが、大正時代に行われた春季大祭の式次が神社に残され、すでに現在の原形が示されており、古くに遡る大祭であったことが窺える。

高宮神社の南には、築後 250 年余を経過しているという元庄屋の屋敷である馬場家住宅がある。黒壁に複雑な屋根組みの落ち着いた佇まいが、歴史の風格を感じさせる。この屋敷周辺には、袖壁に卯建を上げたまちなみや掘割など、かつての宿場の景観が良く残っており、^{ちようちん}提灯屋や^{つくりざか}造酒屋などの伝統産業に従事していた家も古くからの佇まいを今に伝えている。



馬場家住宅

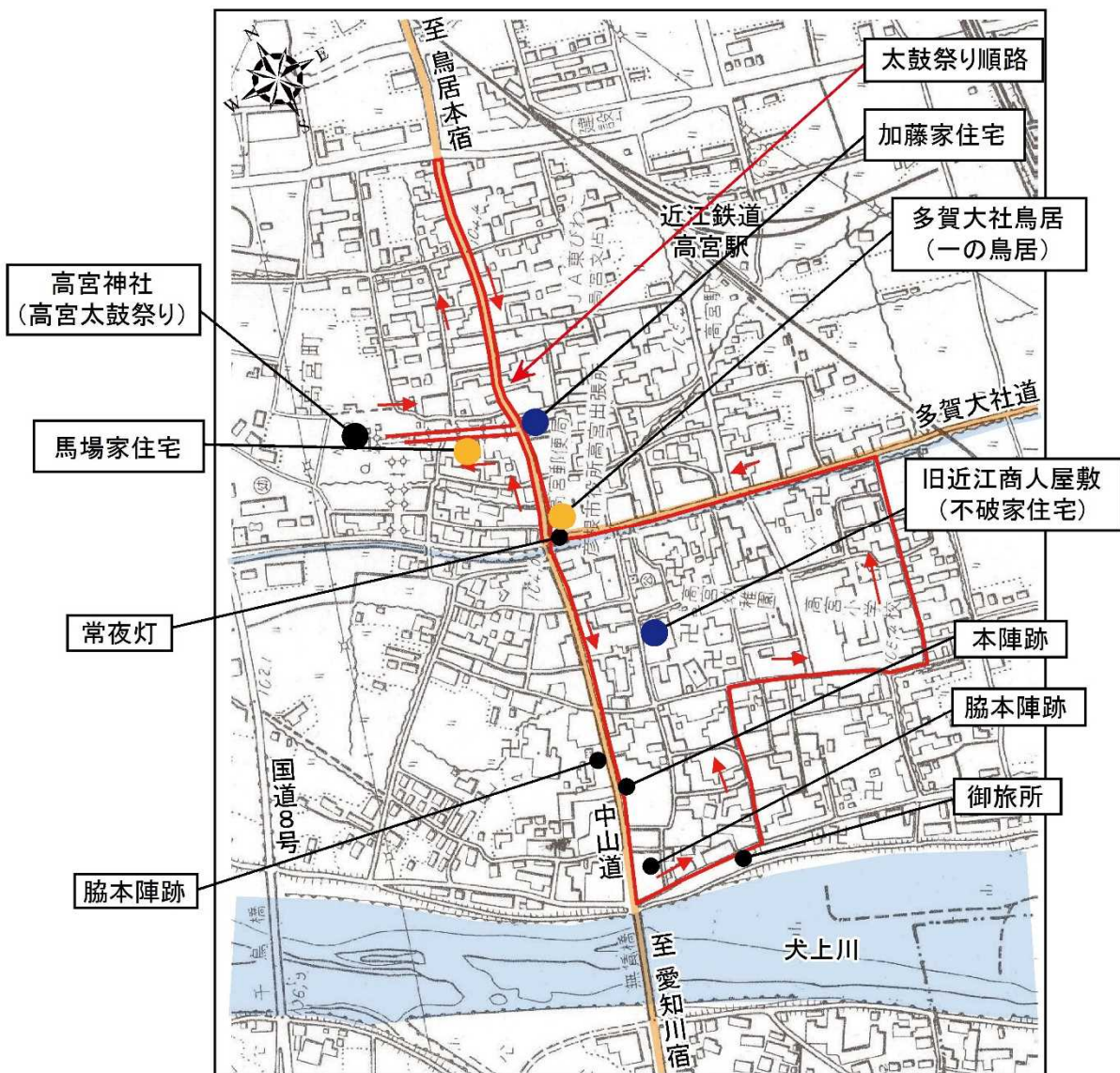
高宮布は、高宮周辺で生産された上質の麻布であり、「高宮上布」とも通称された。古く室町時代にその記録が確認され、室町時代以降は将軍や諸大名の贈答品として珍重されたものであり、井伊家が彦根の地に封じられて以降も、年々の進物に用いている。近郷で織られた高宮布は、いったん高宮に集荷されて売り捌^{さば}かれた。城下町の武士や町人の内職としても織られていたものであり、^{かみしも}袴・^{はかま}袴や^{のれん}暖簾などに用いられていたようである。平成 20 年 (2008 年)、高宮地域文化センターで催された「高宮布まつり」では、高宮布の製法や作品を紹介し、製織道具などの展示のほか、機織りの実演や体験が行われた。高宮布は、今では見るものが少なくなったが、近年、再び注目が集まるようになってきている。



文化 12 年 (1815 年)
「近江名所図会」に描かれた高宮布の店
(彦根城博物館蔵)



高宮のまちなみ



高宮神社 春季大祭渡御列順 (平成16年度) (高宮神社提供)					
一番	鉦	本町	十番	鉦	中町
二番	太鼓・鉦	新町	十一番	太鼓・鉦	門口町
三番	鉦	七軒町	十二番	鉦	高橋町
四番	太鼓・鉦	竹之腰町	十三番	太鼓・鉦	鳥居上町
五番	鉦	宮町	十四番	鉦	西町
六番	太鼓・鉦	両小路町	十五番	太鼓・鉦	中北町
七番	鉦	御旅町	十六番	鉦	五社町
八番	太鼓・鉦	東出町	十七番	太鼓・鉦	大北町
九番	鉦	上町			

凡例



- 登録有形文化財
- 指定文化財
(県・市)

(1) 高宮宿と高宮まつり

（2）鳥居本宿と商い

旧鳥居本宿の街道が大きく鉤手に曲がる一角にある重要文化財有川家住宅は、鳥居本の名産「赤玉^{あかだま}神教丸^{しんきょうがん}」の製造販売を現在も続ける大店舗である。赤玉神教丸は、下痢・腹痛・食傷などに効果のある妙薬で、多賀大社の神の教えによって調合したと伝えられ、その名があるという。今も彦根辺りでは、各薬局で赤玉神教丸が売られ、薬箱に赤玉神教丸を備えている家庭も多い。万治元年(1658年)頃の創業と伝え、店舗販売を主に、各地の薬屋と特約して取次販売なども行った。最盛期には、製造職人・販売人・番頭などを合わせると80人余に達したようであり、その店頭販売の賑わいは、文化12年(1815年)刊行の『近江名所図会』にも描かれるほどであった。現存する重要文化財の主屋は、宝暦年間(1751年～1764年)の建立と伝え、幕末の和宮降嫁や明治天皇の北国巡幸の折には、小休所に当てられた。

鳥居本宿を構成する村々は、近世以前は佐和山城の城下町の縁辺部に位置していたが、江戸時代に入って間もなく、小野^{おの}宿に代わって宿駅の機能を持つことになった。百々^{どど}村、西法寺^{さいほうじ}村、鳥居本村、上矢倉村の4村が1つになって宿場を構成しているため、今も極めて細長いまちなみとなっている。本陣1軒、脇本陣2軒は高宮宿と同じだが、規模はそれほど大きくはない。

現在も、江戸時代以来の成宮^{なるみや}家住宅、百々家住宅、岩根^{いわね}家住宅をはじめ歴史的建造物が良好に残り、宿場の面影を良く伝えている。

旧鳥居本宿の街道筋中央には、道中合羽^{どうちゅうかつば}形の看板を軒先に掲げた家(松本商店)が存在する。かつての名産「鳥居本合羽」の看板である。鳥居本合羽は、馬場弥五郎が四国伝来の合羽製作技術を学んで商いを始めたのが起源と伝えているが、やがて柿渋^{かきしぼ}を塗布するなどの技術改良を重ね、鳥居本宿が天候の荒れやすい木曾街道の入口にあたるという地の利もあって、道中合羽としての需要を拡大していった。合羽製造業者は、文化文政期(1804年～1830年)頃には15軒を数えたという。



重要文化財有川家住宅
(赤玉神教丸本舗)



近江名所図会(鳥居本神教丸店)
(彦根城博物館蔵)



鳥居本合羽の看板



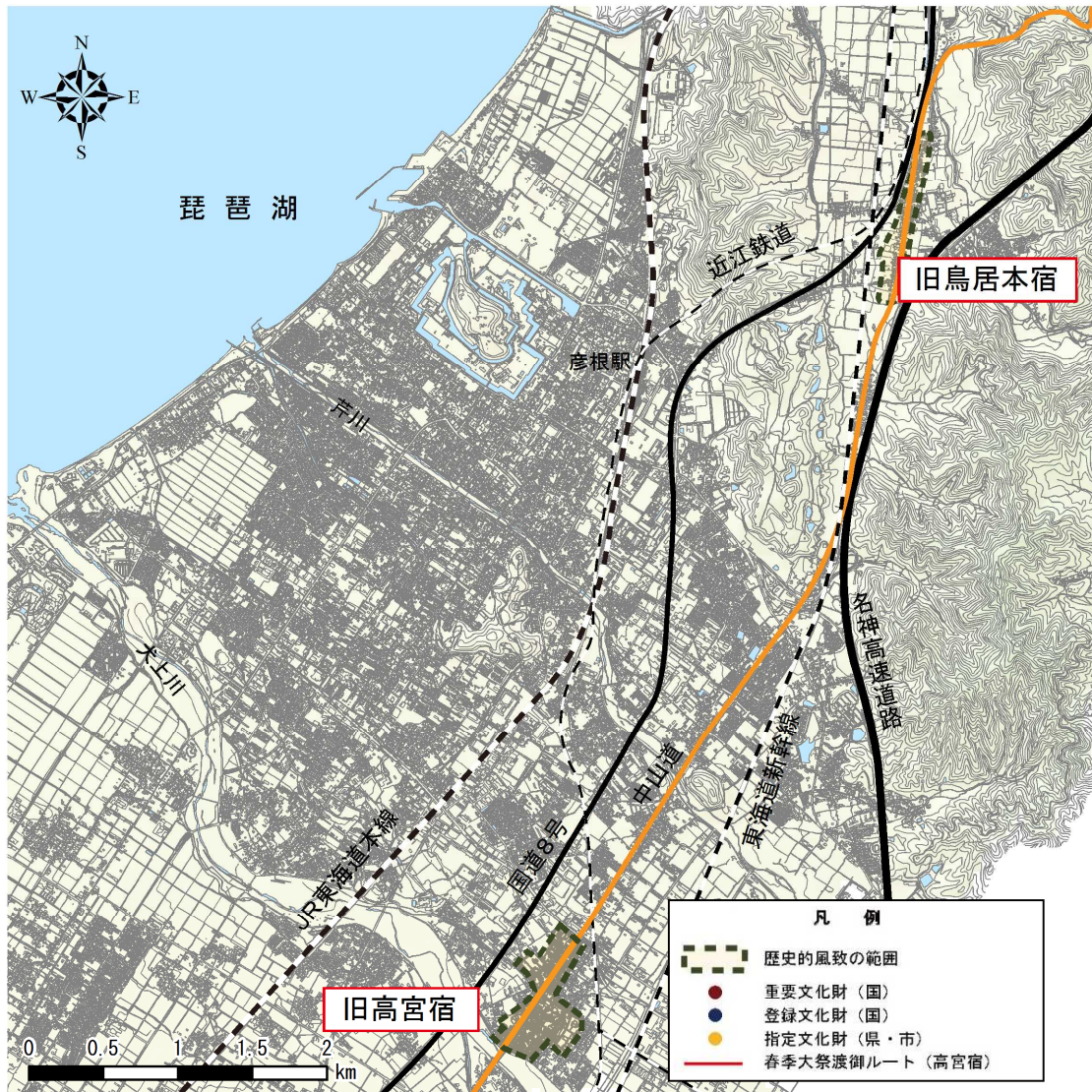
(3) 鳥居本と商い

まとめ

高宮の町は、中山道の宿場として多くの人々が往来した町である。その宿場の中央に位置する高宮神社は、春と秋に大祭が催される。中でも春祭りは、「高宮太鼓祭り」とも呼ばれる大掛かりな祭りで総勢 500 人を超える大行列で祭りを盛り上げる。街道筋には、常夜燈のほか宿場に特徴的な施設や伝統産業に従事する歴史的建造物が、今も数多く姿を留め今に伝えている。

鳥居本宿は、百々村、西法寺村、鳥居本村、上矢倉村の 4 村が 1 つになって宿場を構成していた。その街道筋中央には、道中合羽形の看板を軒先に掲げた家が存在する。また、重要文化財有川家住宅は、名産「赤玉神教丸」の製造・販売を現在も続けている。彦根周辺では、各薬局で赤玉神教丸が売られ、各家庭の薬箱に備えられている。

高宮、鳥居本の町は、江戸時代以来の歴史的建造物が良好に残るとともに、江戸期から続く生業や祭りが今も営まれ、これらが一体となって中山道の宿場町としての歴史的風致が形成されている。



中山道の宿場町（高宮宿・鳥居本宿）にみる歴史的風致

4 こうじんやま 荒神山にみる歴史的風致

荒神山の山頂にある荒神山神社は、厄災を祓う荒神として広く信仰されている。中でも毎年 6 月 29 日から 30 日にかけて催される夏越しの祓「水無月祭」は、荒神山神社最大の祭としてよく知られる。拝殿前のススキで作られた茅の輪をくぐって無病息災を祈り、子どもを火の災いから守るために子ども神楽が奉納される。山麓の遥拝殿への道筋には露店が並び、大変な賑わいとなる。昭和 6 年（1931 年）6 月 21 日の新聞には、参詣者で大賑わいとなりそうで、「彦根芹橋および河瀬駅からバスを臨時運転する」とある。現在の本殿は、明治 12 年（1879 年）の建築で、三間社流造り 間口三間 奥行三間、拝殿は、明治 28 年（1895 年）建築で、入母屋造正面千鳥破風一間向拝付 間口三間四尺 奥行三間で、いずれも登録有形文化財である。その他幣殿（渡殿・登録有形文化財）、神饌所（登録有形文化財）、神楽殿（登録有形文化財）、遥拝殿（市指定文化財）、社務所（市指定文化財）、書院及び書院中門（市指定文化財）、鳥居（登録有形文化財）がある。

また、山中の南西に稲村神社が位置する。社伝によると、天智天皇の六年、常陸国久慈郡稲村に鎮座の稲村神社の分霊を当稲里町小字塚の地に迎え、奉祀したのが始まりとされている。平流庄十三ヶ字の産土神であり、天正兵火後、現在の山上の地に鎮座された。現在の本殿は、三間社流造り、間口二間三尺、奥行二間で、寛政 5 年（1793 年）8 月の建築のものである。春季例大祭「太鼓登山」が良く知られ、山麓 9 町がそれぞれ受け台に乗せた大太鼓を、各町から稲村神社に担ぎ上げるのを競う勇壮な行事である。担ぎ棒を組み立て、大太鼓を台に乗せて飾るなど祭の準備は若衆が行う。およそ 100 年の歴史があると伝え、大正時代後期に書かれた『稲村郷土誌』に、祭りのようすが記されている。

荒神山周辺は、彦根では早くから開発の進んだ地域である。おそらく水稻農耕の伝来とともに、近くを流れる宇曽川の水を引き込んだ水田開発が始まり、やがて水稻農耕がもたらす富を一元的に掌握した人物によって荒神山の山頂近くに全長 124m の大型前方後円墳である荒神山古墳（古墳時代前期）が築かれた。

そして古墳時代後期になると、山中に小円墳が 30 基以上築造されるなど、古墳時代を通じて葬送の山として機能してきた荒神山であるが、奈良時代以降、新しく伝来した仏教の要素が加わり、神仏への信仰の山となった。室町時代には平流山と呼ばれ、山頂の奥山寺と山麓の天台宗寺院や神社が深く関わりながら、天台宗延暦寺系の修験の一拠点であったことが知られる。江戸時代になると、奥山寺は厄災を祓う荒神として今日に至るまで広く信仰されている。



荒神山



荒神山神社の水無月祭



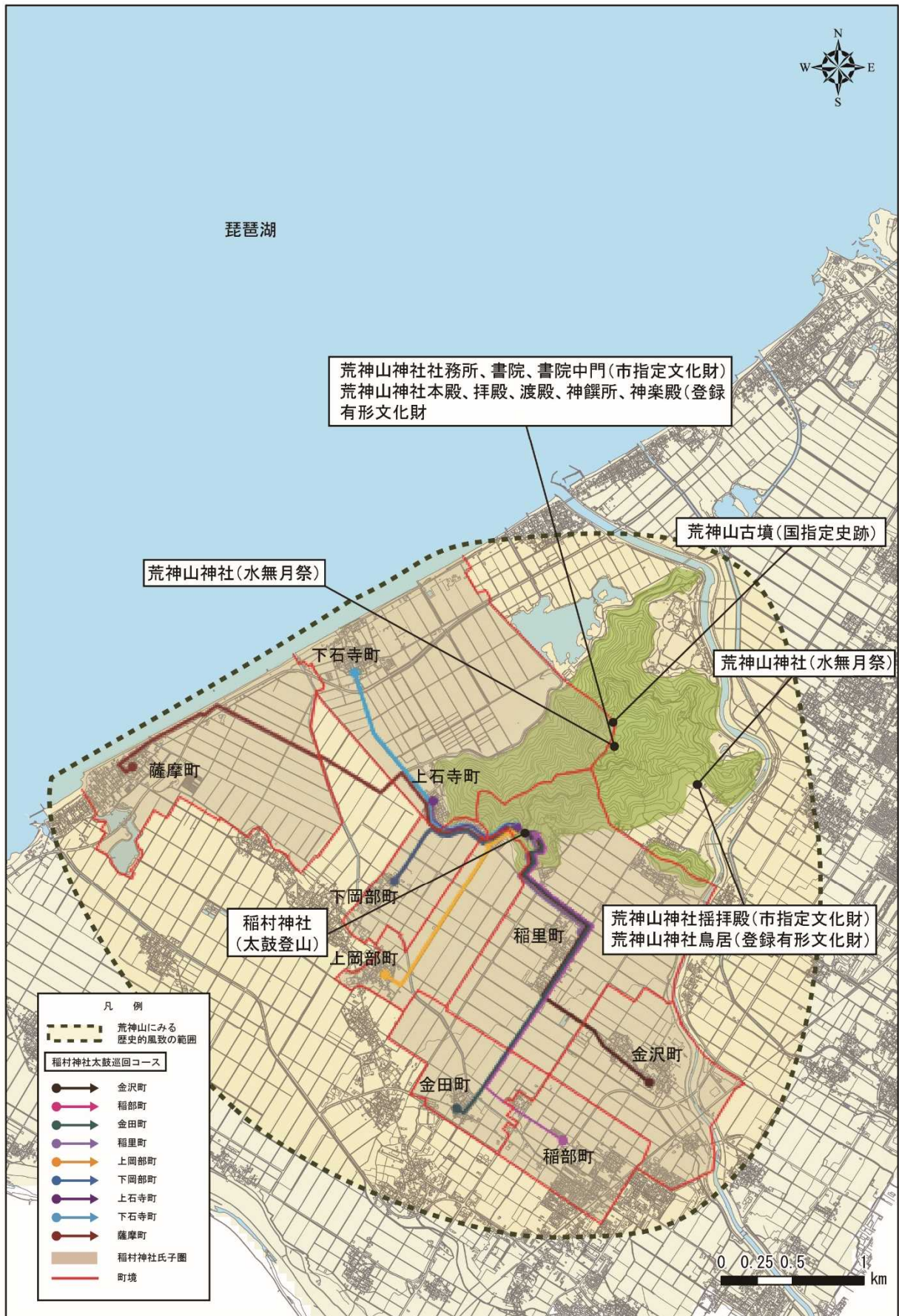
荒神山神社本殿（登録有形文化財）
明治12年（1879年）建立



稲村神社の太鼓登山



稲村神社 寛政5年（1793年）建立



4 荒神山にみる歴史的風致

まとめ

荒神山の山頂近くには、全長 124m の荒神山古墳(古墳時代前期)が築かれている。荒神山周辺は、古墳時代後期に山中に小円墳が 30 基以上築造されるなど、古墳時代を通じて葬送の山として機能してきた。奈良時代以降、仏教の要素が加わり神仏への信仰の山となった。江戸時代になると奥山寺は、厄災を祓う荒神として今日に至るまで広く信仰されている。奥山寺は、明治期に入ると荒神山神社となる。荒神山の山頂にある荒神山神社は、厄災を祓う荒神として広く信仰されている。中でも夏越しの祓「水無月祭」は、荒神山神社最大の祭としてよく知られる。また、山中の南西に稲村神社が位置する。春季例大祭「太鼓登山」が良く知られ、山麓 9 町がそれぞれ受け台に乗せた大太鼓を、各町から稲村神社に担ぎ上げるのを競う勇壮な行事である。

このように、荒神山周辺では、長く信仰の山として祭礼行事が存続しており、荒神山にみる歴史的風致が形成されている。